

古ロシア語と古教会スラブ語における 指示代名詞 *sb, onъ, tь* について

佐 藤 昭 裕

1. はじめに

—— 古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』における指示代名詞 *sb, onъ, tь* の使用——

古ロシア語には *sb, onъ, tь* という3つの指示代名詞がある。*sb* は「近称」、*onъ* は「遠称」とされ、*tь* は対象との距離とは無関係に使用されるとされる¹。現代ロシア語では、このうちの *onъ* が3人称の人称代名詞になった。しかし、古ロシア語では、これらはいずれも指示代名詞として他の名詞とともに現れ、それを修飾する機能をもっていた。すなわち、古ロシア語には、厳密な意味での3人称の人称代名詞は存在しなかったことになる。さらに、これらの指示代名詞が明示的な主語として実際に現れる場合も現代語に比べると限られていた。

次は古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』²の946年の記事、ドレヴリャネ族と戦って死んだキエフ・ルシの公イゴリの妻オリガが夫の仇を討つためにドレヴリャネ族を攻める場面である。a. が古ロシア語のテキスト、b. は対応する現代ロシア語のテキストである³。先に b. を見ると、2箇所では3人称の人称代名詞 *on* の変化形 *oni* 「彼ら」

* 本稿は2010年12月4日に京都産業大学で行われた日本ロシア文学会関西支部2010年度秋季総会における口頭発表「古ロシア語と古教会スラブ語 (OCS) における指示代名詞 *sb, onъ, tь* の使用について」を大幅に改訂、改稿したものである。同発表に際しての参加者からのコメントに感謝する。

1 「これらの代名詞はそれぞれが固有の意味を持ち特定の場面に限って使用された：*tь, ta, to* — 絶対的な指示 (безотносительное указание) のため；*onъ, ono, ona* — 遠くの対象を指示するため；*sb, si, sje* — 近くの対象を指示するため。」Ivanov (1983: 301)

2 1110年代にキエフで完成したロシア最古の年代記。その成立については佐藤 (2005) の序章、とくに pp.1-7 を、内容については同第1章、とくに pp.11-12. を参照のこと。

3 ソロヴィヨフの『最古時代からのロシア史』Solov'ev (1959) の該当部分である。これは、年代記テキストをそのまま現代ロシア語に翻訳したものではなく、年代記の該当部分と同じ内容を著者自身の言葉、現代ロシア語で語り直したものであり、比較的自然的な現代ロシア語であると理解できる。

と ona「彼女」が現れている。しかし本来の古ロシア語テキストでは現代語の oni が現れる箇所には oni の代わりに強意の定代名詞 samъ「自身が」の複数形 sami が現れ、ona が現れる箇所には明示的な主語は一切現れない⁴。

(1) a. a Derevljane zatvorišasja vъ gradě. i borjachusja krěpko izъ grada. věděchu bo jako sami (samъ; m.pl.Nom.) ubili knjazja. i na čto sja predati. i stoja Olga lěto. [i]

ne možaše vzjati grada. i umysli sice. posla ko gradu gl<agolju>šti. [PVL. 58-13]

ドレヴリャネは町のなかに立てこもり、町のなかから激しく戦った。自分たちが（イゴリ）公を殺し、そのことに対して報いを受けなければならないことを知っていたからである。オリガは夏中（そこに）とどまったが、町を占領することができなかった。そこで一計を案じ、町に使者を送って言った。

b. Korostency bilis' krepko, znaja, čto oni (on: m.pl.Nom.) ubili knjazja i potomu ne budet im milosti, kogda sdadutsja. Celoe leto prostojala Ol'ga pod gorodom i ne mogla vzjat' ego, togda ona (on: f.sg.Nom.) pridumala vot čto sdelat': poslala skazat' v Korosten' (Solov'ev. 1959: 154-155)

コルスニの人々（＝ドレヴリャネの人々）は頑強に戦った。彼らが（イゴリ）公を殺したので、降伏すれば、彼らは容赦されないと知っていたからである。まる一年の間オリガは町の外に陣を敷いていたが、これを落とすことができなかった。このとき彼女はあることを思いついた。そしてコルスニの町に使者を送って言った。

さらに年代記『過ぎし年月の物語』における onъ と sb の使用を観察すると、テキストのタイプとこの2つの指示代名詞の使用の間にはっきりとした相関関係が存在することが観察される。

まず『過ぎし年月の物語』全体のテキストを構成する下位のテキスト単位として、「事

4 以下次の略語を用いる。1: 1st person, 2: 2nd person, 3: 3rd person; Acc.: accusative; Act.: active; AnImpf.: analytical imperfect; AnP.: analytical passive; aor.: aorist; f.: female; impf.: imperfect; Jn.: John; l-prt.: l-participle; Mk.: Mark; m.: masculine; n.: neuter; Nom.: nominative; P.: passive; past.: past; pl.: plural; plpf.: pluperfect; pr.: present; Prt.: participle; sg.: singular.

「事実叙述」タイプと「コメント」タイプという2つのタイプのテキストを区別することにする。

「事実叙述」タイプのテキストは動詞の過去形（アオリスト、未完了過去）を使用し、実際に起きた事件、出来事を語るタイプのテキストである。そこでは、直接引用の形で、登場人物の台詞が多く含まれる。一方「コメント」タイプのテキストは、動詞の過去形と現在形の両方を使用し、起きた事件、すなわち「事実叙述」タイプのテキストで語られた出来事の生起を再確認したうえで、作者の立場からこれを評価する。分詞（現在分詞、過去分詞）は両方のタイプのテキストに現れる。年代記の書き手はキエフの「洞窟修道院」の僧たちであり、「作者の立場からの評価」はおのずとキリスト教的立場、正教の立場からの評価ということになる。従って、「コメント」タイプのテキストには、聖書からの引用が多く含まれる。図式的に見れば、2つのタイプのテキストが交互に現れて年代記の記述が進められていくことになる⁵。

次の(2)は1019年の記事で、「事実叙述」タイプのテキストの例である。動詞は、分詞を除けば、すべて過去形、すなわちアオリスト、未完了過去に限られている。また登場人物の言葉が3回引用されている。そして遠称の *onъ* が2回現れる。この *onъ* が2回とも強調の小詞 *že* を伴ったSV語順の節の主語として現れていることが注目される。*onъ* を主語とするこのような構文を *onъ že V* 構文と呼ぶことにする。

- (2) K večeru že odolě(aor.3sg.) Jaroslavъ. a S<vja>topolkъ běža(aor.3sg.). i běžaštju(Act.Prt.pr.) emu napade(aor.3sg.) na nъ běsъ. i raslaběša(aor.3pl.) kosti ego. ne možaše(impf.3sg.) sěděti [na koni]. i nesjachutъ(impf.3pl.) i na nosilěchъ. prinesoša(aor.3pl.) i къ Bestoju bĕgajušte (Act.Prt.pr.) s nimъ. onъ (onъ: m.sg.Nom.) že gl<agola>še(impf.3sg.) “pobĕgnĕte so mnoju. ženutъ po nasъ.” otroci že ego vsylachu (impf.3pl.) protivu. “eda kto ženetъ po nasъ.” i ne bě(impf.3sg.) nikogože vslēdъ gonjaštgo. i bĕžachu(impf.3pl.) s nimъ. onъ

5 厳密には、この2つの他に、1)直接話法で引用された登場人物の台詞（上述の通り「事実叙述」タイプのテキスト中によく現れる）、および 2)聖書からの引用（同じく「コメント」タイプのテキスト中によく現れる）の2つもそれぞれ独立のテキストタイプとして区別する必要がある。

(onъ: m.sg.Nom.) že v nemošti leža (Act.Prt.pr.). [i] vъschopivъsja (Act.Prt.past.)
gl<agola>še (impf.3sg.). “ose ženutъ [o ženut] poběgněte.” [PVL. 144-27]

夕方近くになってヤロスラフが勝った。スヴァトボルクは逃げた。そして彼が逃げる途中、悪魔が彼に襲いかかった。彼の四肢は萎え、[馬に] 乗っていることができなかった。そこで（人々は）彼を担架に乗せて運んだ。（人々は）彼と共に逃げながら彼をベレスチエに運んで来た。一方、彼は言い続けた、「私を連れて逃げろ。私たちの後を（敵が）追ってくる」と。彼の下級従士たちは、（物見を敵に）向けて送って（言った）、「誰か我々を追いかけて来ないか」と。しかし、誰も後を追ってくる者はいなかった。そして（人々は）彼を連れて逃げ続けた。一方、彼は病に伏し、身を起しては言い続けた、「ああ、そら、（敵が）追いかけて来る。[追いかけて来る。] 逃げろ」と。

onъ že V 構文はこのような事件の叙述のなかで、2人の人物、2つのグループが現れ、両者の行動が交互に語られるときに、その一方について使用される。ここではスヴァトボルクとその従者たちの行動が対比されている。ここで onъ は直接先行する文の主語を承けるのではなく、先行する文との間で主語が交替する。直接先行する文中にはしばしば斜格形の先行詞が現れるが、主格をとる先行詞はより離れたところにしか見つからない。onъ の持つ「遠称」という意味は、主格の形をとる先行詞とのテキスト上の距離が遠い、という形で現れることになる。

さらにこの例のなかで明示的な主語が現れる場合についてみると⁶、odolě Jaroslavъ 「ヤロスラフが勝った」、běžaštju emu、「彼が逃げる途中」、napade na nъ bēsъ 「悪魔が彼に襲いかかった」、raslaběša kosti ego 「彼の四肢は萎えた」と、いうように、小詞 že や a を伴わない場合には VS 語順が現れるのに対して、a S<vja>toppolkъ běža 「スヴァトボルクは逃げた」、onъ že gl<agola>še 「一方、彼は言い続けた」、otroci že ego vsylachu protivu 「彼の下級従士たちは、（物見を敵に）向けて送った」、onъ že v nemošti leža. [i] vъschopivъsja gl<agola>še 「一方、彼は病に伏し、身を起こしては言い続けた」のように、小詞 že あるいは a が現れる場合に

6 主語を「下波線」で、動詞を「下線」でマークする。

は *S že V* (*onъ že V* 構文もそのなかに含まれる) ないし *a SV* という形で *SV* 語順がとられることが観察される。語順と小詞の使用、そして指示代名詞 *onъ* の使用が密接に関係していることが分かる。そしてこれらが一体となって、『過ぎし年月の物語』の「事実叙述」タイプのテキストの文体的特徴、いわば「語りのスタイル」といったものを作っていると考えられる⁷。

これに対して、次は「コメント」タイプのテキストの例である。上の(2)に直接後続する部分である。動詞の現在形が現れる文、あるいはそれが省略されていると見なしうる文はイタリックでマークした。ここでは2つのタイプの *sb* が現れることに気づく。1つは添え字の *B* を付した *se* という形で現れるもの、いま1つは添え字の *A* を付したものである。*B* を付した *se* は *sb* の中性単数対格形であり、訳文で「このこと」「これ」と訳したが、先行文脈で語られた事柄全体、先行文脈の内容を指す。すなわち特定の名詞を先行詞として持つものではない。一方 *A* を付した *sb* はコメントの対象となった人物スヴァトポルクに対して使用されている。これも特定の先行詞を承ける照応形ではなく、コメントの対象となる人物を直接指示するものであり、その意味で直示的使用に近いものと言える。このとき *sb* の持つ「近称」という意味は、書き手（あるいは読者）と指示対象の心理的距離が小さい（近い）という形で実現することになる。

- (3) *egože po pravdě. jako nepravednu sudu našedšju (Act.Prt.past.) na nъ. po ošestvii sego světa. prijaša (aor.3pl.) muky okanъnago pokazovaše (impf.3sg.) javě poslanaja pagubnaja rana. vъ sm<e>rtъ nemilostivno vъgna (aor.3sg.). i po sm<e>rty věčno mučimъ (Pass.Prt.pr. → AnP.pr.3sg.) estъ (pr.3sg. → AnP.pr.3sg.) svjazanъ (Prt.P.past.). estъ (pr.3sg.) že mogyla jeho v pustyni i do sego dne. ischoditъ (pr.3sg.) že ot neja smradъ zoľ. se^B (sъ: n.sg.Acc.) že B<og>ъ pokaza (aor.3sg.) na nakazanъe knjazemъ Rusъsky<m>. da ašte siř^A (sъ: m.pl.Nom.) ešte sice že stvorjatъ (pr.3pl.) [se^B (sъ: n.sg.Acc.) slyšavše (Act.Prt.past.) tu ž<e> kaznъ priimut (pr.3pl.). no i boľši see. ponež<e> vѣdaja (Act.Prt.pr.) se^B (sъ: n.sg.Acc.) sъtvorjatъ (pr.3pl.) takože zlo. ubiistvo 7 bo*

7 佐藤 (2005) の第1章を参照。

mьstii prija(aor.3sg.) Kainъ ubivъ(Act.Prt.past.) Avelja. a Lamechъ 70. Poneže
 bě(impf.3sg. → AnImpf.3sg.) Kainъ ne vědyi(Act.Prt.pr. → AnImpf.3sg.)
 mьštenъja prijati ot B<og>a. a Lamechъ vědyi(Act.Prt.pr.) kaznъ byvši(Act.
 Prt.past.) na praroditelju ego. stvori(aor.3sg.) ubiistvo. «reč<e>(aor.3sg.) bo
 Lamechъ kъ svoima ženoma. “muža ubichъ vъ vředъ mně. i unošju vъ jazvu
 mně. těmъže» reč<e>(aor.3sg.) «70 Mьstii na mně.»⁸ poneže” reč<e>(aor.3sg.)
 “[se^B(sb: n.sg.Acc.)] vědaja stvorichъ se^B(sb: n.sg.Acc.)” Lamechъ. ubi(aor.3sg.)
 dva brata Enochova. i poja(aor.3sg.) sobě ženě eju. se^A(sb: m.sg.Nom.)⁹ že
S<vja>topolkъ novyi Avimelechъ. iže sja bě(impf.3sg. → plpf.3sg.) rodilъ
 (l-prt. → plpf.3sg.) ot preljudějanъja. iže izbi(aor.3sg.) bratju svoju. s<y>ny
 Gedeony. tako i sb^A(sb: m.sg.Nom.) bys<tъ>(aor.3sg.). [PVL. 145-14]

正義に照らして正しくないものとして彼の上に裁きが降り、この世から去った後
 に種々の苦しみがこの呪われたものを捕えたのである。(神によって) 送られた
 破滅的な打撃が明らかに現れ、容赦なく(彼を) 死に追い込んだ。そして(彼は)
 死後も、縛り付けられ、永遠に苦しめられるのである。彼の墓は今に至るまで荒
 野のなかにあり、そこからはひどい悪臭が出ている。これは^B神がルシの公たち
 に対する教えとして示したのである。もしこの人々が^A、[このことを^B聞いた
 上で]、なお同じように行うならば、[同じ罰を受けるであろう、それもこれより
 なお大きな罰を)。何故ならこのことを^B知りながら]同じように邪悪なことを、
 殺人を[行うからである]。カインは、アベルを殺して、7つの復讐を受けたが、
 レメクは70の(復讐を受けた)。というのはカインは神から復讐を受けること
 なるのを知らなかったが、レメクは、彼の先祖に加えられた罰を知りながら、殺
 人を行ったからである。『レメクは自分の2人の妻に言った、「私は私の痛手のた
 めに人を殺した。そして私の傷のために若者を(殺した)。それゆえ』—(彼は) 言っ
 た—『私には70の復讐が(ある)』—(彼は) 言った—[このことを^B] 知りな

8 「創世記」4.23-24からの引用。

9 se は本来は中性・単数・主格形であるが、ここではラザヴィル写本、アカデミー写本にある sei という形で読む。sei は男性・単数・主格 sb の異形態である。

がらこれを^B行ったからである」。レメクはエノクの2人の兄弟を殺し、彼らの妻を自分のものとした。この^Aスヴァトボルクは新しいアビメレクである。姦淫から生まれ、ギデオンの子である自分の兄弟たちを殺した(あのアビメレクであった)。このもの^A (=スヴァトボルク) も同じであったのである。

いま一つ「コメント」タイプのテキストをあげる。上の(1)に現れたオリガ公妃が死んだ後の、彼女に対するコメントである。ここでもBを付した *se* は先行文脈全体を指すが、Aを付した *si* はコメントの対象となるオリガ公妃を指している。なおここでは遠称の *onъ* が女性形の *ona* という形で現れて、このオリガと対比される聖書中の人物「南の女王=シバの女王」を指しているのが興味深い。

- (4) **se^B** že bys<тъ>(aor.3sg.) jakože pri Solomaně. pride(aor.3sg.) c<a>r<i>ca Efiopъskaja k Solomanu. slyšati chotjašti pr<e>m<u>dr<os>ti Solomani. i mnogu m<u>drostъ vidě(aor.3sg.) i znamjanъja. takože i **si^A**(sb: f.sg.Nom.) **bl<a>ž<e>naja Olga** iskaše(impf.3sg.) dobroě m<u>dr<o>sti B<o>žy. no **ona^C**(onъ: f.sg.Nom.) č<e>l<o>v<ě>č<e>ski. a **si^A**(sb: m.sg.Nom.) B<o>žbja. ištjušti(Act.Prt.pr.) bo m<u>dr<o>sti obrjaštutъ(pr.3pl.). [PVL. 62-8]
- これは^Bソロモンの時 (にあったの) と同じであった。エチオピアの女王がソロモンのもとにやって来た。ソロモンの知恵を聞くことを望んだのである。そして多くの知恵を見、また(その)しるしを(見た)。そのようにこの^A祝福されたオリガもまた、神のよき知恵を求めていたのである。しかし彼女の女^C (=エチオピアの女王) は人間の(知恵を求めたのだが)、この女^A (=オリガ) は神の(知恵を求めたのである)。知恵を求めるものは見出すのである。

この「コメント」タイプのテキストでは、語順は現代語と同じ機能的原理に従って選択されているように見える。*sb* は、主語として使われる場合はSV語順の節の主語として文頭に現れ、先行文脈の内容を指す中性の *se* が対格目的語として用いられる場合にも、やはり文頭に現れる。すなわちテーマとして選択されていることに

なる。例(3)と例(4)に現れる *sb* の例を抜き出してみると次の通りである。殆どが文頭に現れていることが確認される¹⁰：*se* *že* *B<og>b pokaza* na nakazanie knjazemъ Rusьskij<m>. 「これは神がルシの公たちに対する教えとして示したのである」；*ašte* *sij* *ešte* *sice* *že* *stvorijatъ* 「もしこの人々がなと同じように行うならば」；*se* *slyšavše* 「このことを聞いた上で」；*vědaja se* 「このことを知りながら」；*se* *vědaja* 「このことを知りながら」；*stvorichъ se* 「(私は) これを行った」；*se* *že* *S<vja>topolkъ novyi Avimelechъ* 「このスヴァトポルクは新しいアビメレクである」(動詞は省略されている)；*tako i sb* *bys<tb>* 「このものも同じであった」；*Se* *že* *bys<tb>* *jakože* *pri Solomaně*. 「これはソロモンの時(にあったの)と同じであった。」；*si* *bl<a>ž<e>naja Olga* *iskaše* *dobroē m<u>dr<o>sti B<o>žji*. 「この祝福されたオリガもまた、神のよき知恵を求めていたのである。」；*a si* *B<o>žja*. 「この女(=オリガ)は神の(知恵を求めたのである)」。

以上の観察は、次の(5)と(6)のようにまとめられる。

(5) 「事実叙述」タイプのテキストにおける照応形の使用

1. 遠称の指示代名詞 *onъ* が多く使用される。
2. *onъ* は *onъ že V* 構文(主語 *onъ* + 小詞 *že* + 動詞)の主語として現れる。
3. *onъ že V* 構文は主語が連続せず、直接先行する文との間で主語が交替するときに使用される。
4. *onъ že V* 構文は物語のなかで2人の人物、あるいは2つのグループが対立して現れ、両者の行動を交互に語るときにその一方に対して使用される。
5. *onъ* の持つ「遠称」という意味は、主格の形をとる先行詞とのテキスト上の距離が遠いという形で現れる。
6. *onъ* は「先行詞が必要」という意味では「照応形」である。しかし、その使用は語順と一体になって、「事実叙述」タイプのテキストに特有の文体的特徴を作りだすために働いている。

10 主語を「下波線」で、直接目的語を「下2重線」で、そして動詞を「下線」でマークする。

(6) 「コメント」タイプのテキストにおける照応形の使用

1. 近称の指示代名詞 sb が多く使用される。
2. sb には2つの用法がある。1) 先行文脈の内容、そこで語られた事柄全体を指す用法、2) コメントの対象となる人物（＝物語の主要な登場人物）を指す用法である。
3. 1)の用法の場合、特定の名詞句を先行詞としてとることはない。2)の用法の場合も、コメントの対象となる人物を直接指すという意味で、直示的用法に近い。
4. 2)の用法の場合、sb の持つ「近称」という意味は、書き手（あるいは読者）と指示対象の心理的距離が小さい（＝近い）という形で現れる。
5. 「コメント」タイプのテキストでは語順は現代語と同じ機能的原理によって選択され、特別な文体的意味を持たない。sb はテーマを表す形として文頭に現れることになる。

『過ぎし年月の物語』における onb と sb の使用については、概ね以上のようなことが分かってきた¹¹。「中称」の tb については、『過ぎし年月の物語』のテキストの分析からは、必ずしもはっきりしたことは分かっていない。

そこで本稿では、このような古ロシア文章語、すなわ共通東スラブ文章語の指示代名詞の使用について、その起源の問題を考えたい。すなわちこのような指示代名詞の使用が古教会スラブ語の影響によるものなのか、それとも古ロシア語、共通東スラブ語のなかで独自に発展してきたものなのか、という点を明らかにすることを目指し、予備的な調査を行いたい。onb že V 構文については、筆者はすでにこの構文が古教会スラブ語福音書、またスラブ世界最古の聖者伝である『キリル伝』『メトディオス伝』にも現れることを確認した¹²。しかし全体的体系についてはなお調査が不十分であり、古教会スラブ語の中心的なテキストである福音書についての包括的な記述がどうして

11 以上の議論については佐藤（2005）の第1章を参照のこと。ただし「先行文脈の内容を指す」用法の se については、本稿3章における OCS の sb についての観察の結果に従い佐藤（2005）の考えを修正した。

12 佐藤（2008）、Sato（2008）を参照。

も必要である。本稿では、そのための予備調査として「マルコによる福音書」における基本的な翻訳パターンを調査する。資料としては『マリア福音書』を用いた。

なお以下の例文では、先行詞が現れる句、および当該の代名詞が現れる句に下線を引き、先行詞は□で囲み、当該代名詞は太字でマークする。1つの例文に複数の代名詞やその先行詞が現れ、議論に際してそれぞれを識別する必要がある場合は、適宜添え字^{A, B}を用いて区別した。また「長距離照応」の場合には先行詞を含む文と当該代名詞を含む文の間に現れる文を、下波線でマークした。

2. OCS における指示代名詞 sb, onb, tb の分布

——「マルコによる福音書」について——

2.1 基本的翻訳のパターン

次は、『マリア福音書』(Codex Marianus) の「マルコによる福音書」について sb, onb, tb のすべての使用例について、そのギリシア語原典における形式ならびに分布を調査した結果である¹³。調査の過程でギリシア語原典で tb に対応する形の 1 つであることがはっきりした αὐτός が、一方でスラブ語で samъ とも訳されていることから、αὐτός ⇒ tb の翻訳パターンについても調査した。

13 ただし onb については主格のみを問題とした。*i を起源とする jęgo, jęmu タイプの斜格形は考慮しなかった。

(7) OCS. sb, onъ, tь とそのギリシア語における起源

OCS		Gr.	総数	テキストのタイプ		
				語り	説教	直接話法
sb		οὗτος	69	4	24	41
		ἄλλος	1	0	1	0
		αὐτός	1	1	0	0
		ἐκεῖνος	1	0	1	0
		Nominal	1	0	1	0
		∅	4	0	0	4
		idiomatic	11	2	3	6
onъ	+že	ὁ δέ	47	47	0	0
		∅	5	4	1	0
		ἐκεῖνος	4	2	2	0
		αὐτός	2	1	1	0
		ἐκεῖνος	1	1	0	0
		idiomatic	6	5	0	1
tь		αὐτός	14	7	4	3
		ἐκεῖνος	20	6	14	0
		Nominal	1	1	0	0
		ὁ	1	0	1	0
		οὗτος	2	0	1	1
		∅	3	2	1	0
		idiomatic	13	5	5	3
samъ		αὐτός	7	4	2	1
		σεαυτοῦ	2	0	1	1
		ἐαυτοῦ	2	0	2	0

このなかで「総数」の列で網掛けをした部分が、主要な翻訳パターンということになる。これは次のようにまとめることができる。すなわち sb の起源はイディオムの用法を除けば、事実上 αὐτός に限られる。onъ はこれも事実上は小詞 že を伴った使用に限られ、その主要な起源は ὁ δέ、すなわち「定冠詞 «the» + 小詞 δέ «but, then»」である。že を伴わない onъ の使用の大部分はイディオム的な決まった用法である。一方 tь は sb や onъ と異なり、αὐτός と ἐκεῖνος という 2 つの起源を持つことが注目される。さらにそのうちの 1 つ、αὐτός について見ると、それがすべて tь で翻訳されているだけでなく、定代名詞の samъ で翻訳されている場合も多いことが分かる。以上をまとめると次のようになる。

(8) 翻訳の主要なパターン

οὗτος	➡	сь
ὁ δέ	➡	онъ же
ἐκεῖνος	➡	тѣ
αὐτός	➡	самъ

ここで、ギリシア語の指示代名詞について、高津（1960）および Blass and Debrunner（1961©）に従って予備的に見ておきたい。

まず οὗτος である。古典ギリシア語では、「οὗτος は《この、あの》、即ち聞手の近くに、或いは聞手に関係あるものを」（高津 1960: 309）指し、「ἐκεῖνος との対照に於いて、話者の心に近い、更に重要な、或いは最後に言われた事柄を指す」（高津 1960: 310）とされる。一方、聖書ギリシア語では οὗτος は「(1)その場にいる誰かを指す（指示的）…；先行文脈中で言及された誰か、すなわち談話中で連続して現れる主語を指す（continuative）…；とくにある人物について、その人物が紹介され、説明されたあとで、その人物について語られるべきことを導入する」（Blass and Debrunner 1961©: 151）とされる。さらに「先行する従属節（の内容）について後行する主節で言及する際に非常によく使用される」（Blass and Debrunner 1961©: 151）という。古典ギリシア語には οὗτος, ἐκεῖνος と並んでもうひとつ ὅδε という指示代名詞があり、「《この》、即ち話者の眼前に、身近にあるもの、或いは話者に関係あるものを」（高津 1960: 309）指した。すなわち οὗτος は「聞き手」に近いものを指し、ὅδε は「話し手」に近いものを指すという機能の分配が可能であった。しかし聖書ギリシア語では ὅδε は使われなくなり、そのために、聞き手に近いか、話し手に近いかを問わず、「その場にいる誰か」を指すことになったと考えられる。

古典ギリシア語 ὁ については、「… ὁ, ἡ, τό は Homeros においては未だ指示代名詞で …、二つのものの対照、人物の変わり、同一人物の異なる行動の変わり目を指示する。従ってこれは既に知られているものに聞手の注意をひくため、或いは全く新しいものを告知するために用いられ、唯の承前の（anaphoric）代名詞とは異なる。」（高津 1960: 291）とされ、さらにアッティカ散文における「ὁ (ἡ, τὸ) δέ 《しかし（そして）彼（彼女、それ）は…》」について、「これは文頭において主語が前の文と変わった場

合に普通用いる。」(高津 1960: 292) とされ、聖書ギリシア語の *ὁ δέ* の用法がアッティカ時代に確立していたこと、さらにはホメロス時代に遡ることが分かる。Blass and Debrunner (1961^①) はこの *ὁ δέ* について、「*ὁ δέ* 'but, he' は…語り (narrative) の継続をマークするために使用され、4つの福音書で使用される。ただし「ヨハネによる福音書」での使用頻度は最小にとどまる」(Blass and Debrunner 1961^①: 131) としている。

古典ギリシア語の *ἐκεῖνος* については、「*ἐκεῖνος* は《あの、その》、即ち会話の外にある第三者の、或いは遠くにあるものを指す」(高津 1960: 309) とされ、聖書ギリシア語については、「その場にいない人—もちろん先行文脈のなかで言及されている必要がある—…を指定するために使用される」「とくに語り (narrative) において—これは想像上の語りであることもありうる—、先行文脈中で言及された人について、関連する事物と一緒に言及するために使用される」(Blass and Debrunner 1961^①: 151) とされる¹⁴。

αὐτός には2つの用法がある。1つは強調の「～自身」および「同じ～」を意味する強意の代名詞としての用法であり、1つは指示代名詞、さらには照応形としての用法である。これは、古典ギリシア語では「本来強意の代名詞」(高津 1960: 145) であり、その「主格は強意的用法にのみ用いられ、承前代名詞としては斜格のみが立ち得る」(高津 1960: 308) ものであった。「*αὐτός* 《自身》と《同じ》は *αὐτός ὁ ἀνὴρ, ὁ ἀνὴρ αὐτός* 《その人自身》と *ὁ αὐτός ἀνὴρ, ὁ ἀνὴρ ὁ αὐτός* 《同じ人》の如く定冠詞の位置によって区別されるにすぎず … 定冠詞のない時には両者の区別はなくなる」(高津 1960: 308)。一方、人称代名詞としての使用は聖書ギリシア語に特徴的で「3人称代名詞の等価物として *αὐτός* は、*ὁ δέ* に現れる *ὁ* と同様、強調の 'he' という意味を持つ。これはとく

14 *ἐκεῖνος* が narrative 中に現れるという指摘については、本稿における調査の立場からは、次のような点を指摘しておかなければならない。すなわち、表のデータにあげた通り、少なくとも「マルコによる福音書」では *ἐκεῖνος* ⇒ *tb* タイプの翻訳の例として「イエスの説教」のなかに分類されている14例のうち実質上 narrative と理解できるものは、イエスによる「喩え話」のなかに現れるのは1例のみである。一方、*onb* *ze* あるいは *onb* で訳されている合計5例の *ἐκεῖνος* は2例が語りタイプ、1例がイエスの説教のなかの喩え話であり、これも narrative に含めることができる。一方、*ἐκεῖνος* ⇒ *sb* タイプの1例は、イエスの説教のなかの喩え話のなかに出てくるものの、その結論部分に現れ、動詞が現在形であるため narrative と理解することは困難である。

に「ルカによる福音書」(および「マタイによる福音書」「マルコによる福音書」「70人訳聖書」)に当てはまる」(Blass and Debrunner 1961©: 145)。なお現代ギリシア語ではこの αὐτός が通常の3人称の人称代名詞になったという。(同)

(7)の表では、それぞれの形式がどのようなタイプのテキストに現れるかという分布についても示した。テキストのタイプとして「語り」「説教」「直接話法」の3つを区別した上で、当該の指示代名詞の使用と、テキストのタイプの間に何らかの相関関係があるかどうかを調査した。「語り」は通常の地の文、「直接話法」はイエス、弟子たち、あるいは他の登場人物による日常的な発話、そして「説教」はイエスによる発話のうちで、比較的長く、単なる日常的発話を越えて、何らかの宗教的意味を持つ発話である。そのなかには、明確に人々を教え導く意図を持ってなされた、現代的な意味での説教と同じ働きを持つ発話も含まれる。調査の結果は、3つの指示代名詞の使用と3つのテキストタイプの間で、明確な相関関係があることを示す。すなわち、1) *sb* は「説教」タイプあるいは「直接話法」タイプのテキスト、すなわち話された言葉に現れる、2) *onъ* は *onъ že* の形をとって「語り」タイプのテキストに現れる、3) *tb* は *sb*、*onъ* のように明確な分布を持たず、いずれのタイプのテキストにも自由に現れるように見える¹⁵。

2.2 3人称ゼロ (Ø) 代名詞について

古ロシア語と同様、OCS 福音書においても、明示的な3人称の代名詞の主語は必ずしも多くは現れない。これは主語が省略されていると考えてもよいが、「ゼロ代名詞が使用されている」と理解することも可能である。すなわち、上の(7)、(8)に示された主要な翻訳のパターンとは別に、Ø 代名詞 ⇒ Ø 代名詞という翻訳のパターンを考えることになる。このØ 代名詞は、一般的な、無標の3人称代名詞として、主語が連続する場合、主語が交替する場合、いずれも使用可能である。次の例で A. 1章9節の *isusъ* 「イエス」から同じ9節の Ø *krъsti se* 「(イエスは)バプテスマを受けた」、B. 10節の Ø *vidě* 「(イエスは)見た」への照応関係は、同一の主語が連続する場合であ

15 ἐκεῖνος 起源の *tb* が「直接話法」に現れる例は皆無であるが、同じ話し言葉である「説教」のところで現れている以上、これは偶然の結果と見なしたい。

り、C. 12 節の d<u>chъ izvede i 「御霊は彼を荒野に連れ出した」から 13 節の Ø bě tu vъ pustyni. 40 dьnъ. 「そこで（イエスは）40 日間荒野にいて」への照応関係は、斜格目的語から主格主語への照応関係である。

- (9) Mk.1.9: I bystъ vъ dьni ty. pride is<us>ъ^A (Nominal.: m.sg.Nom.) otъ nazareta galileiskaago. i Ø^A krъsti se otъ ioana vъ iordaně. [10] i abъe vъschode otъ vody. i Ø^B vidě razvodešta se n<e>b<e>sa. i d<u>chъ ěko golaбъ sъchodeštъ na nъ [11] i bystъ glasъ sъ n<e>b<e>se. “ty esi s<y>nъ moi vъzljubleny. o tebě blagovolicъ.” [12] i abъe d<u>chъ izvede i^C (*i: m.sg.Acc.) vъ pustynja. [13] i Ø^C bě tu vъ pustyni. 40 dьnъ. iskušaemъ sotoñoja. [...]

Καὶ ἐγένετο ἐν ἐκείναις ταῖς ἡμέραις ἦλθεν Ἰησοῦς^A (Nominal.: m.sg.Nom.) ἀπὸ Ναζαρετ τῆς Γαλιλαίας καὶ Ø^A ἐβαπτίσθη εἰς τὸν Ἰορδάνην ὑπὸ Ἰωάννου. [10] καὶ εὐθὺς ἀναβαίνων ἐκ τοῦ ὕδατος Ø^B εἶδεν σχιζομένους τοὺς οὐρανοὺς καὶ τὸ πνεῦμα ὡς περιστερὰν καταβαῖνον εἰς αὐτόν [11] καὶ φωνὴ ἐγένετο ἐκ τῶν οὐρανῶν «σὺ εἶ ὁ υἱός μου ὁ ἀγαπητός, ἐν σοὶ εὐδόκησα.» [12] Καὶ εὐθὺς τὸ πνεῦμα αὐτόν^C ἐκβάλλει εἰς τὴν ἔρημον. [13] καὶ Ø^C ἦν ἐν τῇ ἐρήμῳ τεσσαράκοντα ἡμέρας πειραζόμενος ὑπὸ τοῦ σατανᾶ, [...].

Mk. 1.9: そのころ、イエスは^A ガリラヤのナザレから来た。そしてヨハネからヨルダン川で Ø^A (= イエスは) バプテスマを受けた。[10] そして、水のなかから上がるとすぐに、天が裂けて御霊が鳩のように自分の上に下りるのを、Ø^B (= イエスは) 見た。[11] そして天から声がした。「あなたは私の愛する子、私はあなたを喜ぶ。」[12] そしてすぐ御霊は彼を^C 荒野に連れ出した。[13] そこで 40 日間荒野に Ø^C (= イエスは) いて、サタンの誘惑を受けた。

このような Ø 代名詞の使用が代名詞による主語の表示として無標の手段であることを前提に、以下 3 つの指示代名詞の使用について検討する。

3 OCS における「近称」の指示代名詞 sb

「近称」¹⁶とされる sb から分析を始めたい。(10)は(7)に示したデータに加えて、問題となる形式の統語的機能、問題となる形式が単独で現れているか、修飾語として名詞あるいは他の代名詞とともに現れているか（「+Nom., Pron.」の項）¹⁷、そして照応のタイプについての調査結果を示したものである。

照応のタイプについて「直示的」使用は、照応形としての使用ということにはならないが、現実にも最も多い sb の用法である。「先行文脈」は、先行詞が個別の名詞や代名詞の形で現れず、先行の文脈全体を受けるもので ταῦτα (οὗτος; n.pl.Nom.) ⇒ si (sb; n.pl.Nom.) という形で現れるものが多いが、他の形で現れるものもある。「後行文脈」は、後行の文脈全体を指す場合である。「idiomatic」な用法については、統語的機能や照応のタイプは非関与的である。

(10) 全体的分布

OCS	Gr	統語的機能	総数	+Nom., Pron.	照応のタイプ				テキストのタイプ		
					直示的	先行文脈	後行文脈	その他	語り	説教	直接話法
sb	οὗτος	主語	37	13	24	11	2	0	0	15	22
		目的語	23	9	14	8	1	0	2	5	16
		状況語	9	2	3	5	1	0	2	4	3
	ἄλλος	主語	1	0	0	0	1	0	0	1	0
	αὐτός	主語	1	0	0	0	0	1	1	0	0
	ἐκεῖνος	主語	1	0	0	0	1	0	0	1	0
	Nominal	属格修飾語	1	-	1	0	0	0	0	1	0
	∅	主語	3	1	3	0	0	0	0	0	3
	∅	状況語	1	1	1	0	0	0	0	0	1
	idiomatic	-	11	0	-	-	-	-	2	3	6

3.1 主要な翻訳パターン οὗτος ⇒ sb について

(10)の表では、多くの用例があるタイプに網掛を施した。これを見ると、次のような

16 ハブルガーエフは「もし指示される人物あるいは事物が話者（作者）に近ければ、その指示のためには通常指示代名詞 sb «этот»「この」の諸形式が用いられる」(Chaburgaev 1974: 224) とする。

Diels (1963: 208) では «dieser, diese, dieses» という意味が付され、Vaillant (1948: 136) では «celui-ci, ce» という訳が与えられる。

17 数字は他の名詞、代名詞と一緒に現れている場合の内数。

点が明らかになる。

(11) οὗτος ⇒ sb の翻訳について。

1. 話された言葉（「直接話法」「説教」）で使用される。
2. 「直接話法」の場合には直示的使用が多い¹⁸。
3. 「説教」の場合は、先行文脈全体の内容を指すものが多いが、直示的と解釈できるものも多い。また後続する文脈の内容を指す場合もある¹⁹。いずれにせよ特定の名詞を先行詞としてとることはない。

以下、若干の例を見てみよう。まず最初の例は、sb が「直接話法」のなかで、直示的に使用されている例である。目の前にいるイエスについて sb と表現しているのであって、何らかの先行詞、たとえば isusъ といった名詞の存在が前提となっているわけではない。そもそもが、この短い発話（厳密には「発話」ではなく「心のなかで考えたこと」である）は、まさにこの “čto sb ...” で始まるのであり、そこには先行詞が存在する余地がない。

(12) Mk.2.6: bēachā že edini otъ kъnižъ[nižъ]nikъ tu sēdešte. i pomyšlējašte vъ srъdъsichъ svoichъ. [7] “čto **sb** (sb: m.sg.Nom.) tako glagoletъ vlasphimije. kto možetъ otъpuštati grěchy. tkmo edinъ b<og>ъ.”

ἦσαν δέ τινες τῶν γραμματέων ἐκεῖ καθήμενοι καὶ διαλογιζόμενοι ἐν ταῖς καρδίαις αὐτῶν [7] τί οὗτος (οὗτος: m.sg.Nom.) οὕτως λαλεῖ; βλασφημεῖ· τίς δύναται ἀφιέναι ἁμαρτίας εἰ μὴ εἰς ὁ θεός;

ところが、そこに律法学者たちが幾人か座っていて、心のなかで考えた。[7]「なぜこの人は、このように神を汚すことを言うのか。神おひとりのほか、だれが罪を赦すことができよう」。

18 これは表中に示すことはできなかったが、主語として使用される οὗτος について「直接話法」に現れる 22 例のうち、「直示的」と分類可能な例が 18 例、「先行文脈」と考えたのが 4 例であった。

19 「説教」中に現れる 15 例については、「直示的」と分類したものが 6 例、「先行文脈」と考えたものの 7 例、「後行文脈」と考えたものが 2 例であった。

次も「直接語法」のなかで直示的に使用されている例である²⁰。A、Bともに中性形をとっているが、先行詞として中性単数の名詞があるわけではない。イエスが手にとったパン、手にとった杯を *se* 「これ」として表現しているだけである。(12)、(13)いずれの例においても *sb* は主語として文頭あるいは文頭の疑問詞の直後に現れている。

- (13) Mk.14.22: I ědařtemъ imъ priemъ is<us>ъ chlěbъ. bl<a>g<o>sl<o>veřtъ prělo mi. i dastъ imъ i reče. “priiměte **se^A**(*sb*: n.sg.Nom.) estъ tělo moe.” [23] i priimъ čařa chvala vřzda vъ dastъ imъ. i piře otъ neje vъ si. [24] i reče imъ “**se^B**(*sb*: n.sg.Nom.) estъ křvъ moě novaago za[va]věta. prolivaema za mъnogy.”

Καὶ ἐσθιόντων αὐτῶν λαβὼν ἄρτον εὐλογήσας ἔκλασεν καὶ ἔδωκεν αὐτοῖς καὶ εἶπεν· «λάβετε **τοῦτό^A**(οὗτος: n.sg.Nom.) ἐστὶν τὸ σῶμά μου.» [23] καὶ λαβὼν ποτήριον εὐχαριστήσας ἔδωκεν αὐτοῖς, καὶ ἔπιον ἐξ αὐτοῦ πάντες. [24] καὶ εἶπεν αὐτοῖς· «**τοῦτό^B**(οὗτος: n.sg.Nom.) ἐστὶν τὸ αἷμά μου τῆς διαθήκης τὸ ἐκχυννόμενον ὑπὲρ πολλῶν.»

それから彼らが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福して、これを裂き、彼らに与えて言われた。「取りなさい。これは^Aわたしのからだです」。^[23] また杯を取り、感謝をささげて、彼らに与えられた。みながその杯から飲んだ。^[24] そしてイエスは彼らに言われた。「これは^Bわたしの新しい契約の血です。多くの人のために流されるものです」。

このように、ある特定の人物や事物を指す場合の *sb* は直示的用法で使用され、特定の先行詞をとらないのが普通である。そして文頭に現れる傾向が強い。

上の 2. 1 で新約ギリシア語の οὗτος について、「先行文脈中で言及された誰か、すなわち談話中で連続して現れる主語を指す (continuative) …；とくにある人物について、その人物が紹介され、説明されたあとで、その人物について語られるべきことを導入する」という Blass and Debrunner (1961@: 151) の見解を引用した。次はそ

²⁰「直接語法」と「説教」の間の境界は必ずしも明確に引くことはできない。ここでのイエスの発言は極めて宗教的な内容であり、あるいは「説教」と考えるべきかもしれない。

の一例と見なしうる例である。このような場合には、 $\delta\varsigma \Rightarrow i\acute{z}e$ で導かれる従属節全体が、 $\text{o}\acute{\upsilon}\tau\omicron\varsigma \Rightarrow \text{sb}$ の先行詞であると考えられることも可能である。しかしこのような例は、少なくとも「マルコによる福音書」では非常に限られている。

- (14) Mk.3.35: iže bo ašte sъtvoritъ voljā b<o>žij'a **sb** (sb: m.sg.Nom.) bratrъ moi i sestra moě. i mati estъ.

ὅς γάρ²¹ ἂν ποιήσῃ τὸ θέλημα τοῦ θεοῦ, **οὗτος** (οὗτος: m.sg.Nom.) ἀδελφός μου καὶ ἀδελφὴ καὶ μήτηρ ἐστίν.

神のみこころを行なう人、これは、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。

一方、次はイエスの「説教」中で、先行文脈全体の内容を指す例である。ここでは si という形が2回現れる。Aは対格目的語、Bは主格主語である。スペースの都合で先行部分を引用することはできなかったが、先行の文脈において、すなわち13章のこれより前の部分を通して、世界の終末を前に、地上に大きな苦難が生じることをイエスは預言する。そしてA、Bいずれの場合も、この預言の内容全体を sb の中性複数形で承けているのである。先行詞となる特定の名詞があるわけではない。AはVO語順で sb は直接目的語として動詞の後に現れている。BはSV語順で sb は主語として文頭に現れている。ただしいずれも従属節中に現れるので、この例から語順について論じるのは困難である。

- (15) Mk.13.29: “tako i vy egda uzrite **si**^A (sb: n.pl.Acc.) byvajašta. vědite ěko blizъ estъ pri dvъrechъ. [30] amin glagoljā vamъ ěko ne imatъ prěiti rodosъ dondeže vъsě **si**^B (sb: n.pl.Nom.) badatъ.”

«οὕτως καὶ ὑμεῖς, ὅταν ἴδητε ταῦτα^A (οὗτος: n.pl.Acc.) γινόμενα, γινώσκετε ὅτι ἐγγύς ἐστιν ἐπὶ θύραις. [30] ἀμὴν λέγω ὑμῖν ὅτι οὐ μὴ παρέλθῃ ἡ γενεὰ αὕτη μέχρις οὗ ταῦτα^B (οὗτος: n.pl.Nom.) πάντα γένηται.»

21 **ἡ** *pl.* による。以下、異読テキストに基づいて引用した箇所はイタリック表記し、注に該当本を示す。

「そのように、あなた方は、これらのことが^A起こるのを見たら、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。[13.30] まことに、あなたがたに告げます。これらのことが^B全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。」

先行文脈の内容を指す *sb* が主節に現れる例を見てみよう。次は永遠の命を得るにはどうしたらよいか、教えを乞いに来た人に対して、イエスが何をしたら良いかを語ったあと、その人がイエスに答えた言葉である。ここでは中性複数対格形の *vsě si* 「それらはすべて」が文頭に現れている。これは特定の名詞句（候補となるのは *tās ěntolās* ⇒ *zapovědi věsi* である）を先行詞としてとると解釈できないわけではないが、むしろ「殺してはならない。姦淫してはならない。…」といった教えの内容そのものであると考えられる。

- (16) Mk.10.19: “zapovědi věsi 『ne přeljubъ děi. ne ubi ne ukradi. ne lžže sьvědětelstvui. ne obidi. čti ot<ъ>ca tvoego i m<a>t<e>rъ.』” [20] онъ же отъвѣставъ рече ему. “učitelju **vsě si**(*sb: n.pl.Acc.*) *sъchranichъ отъ junosti moeje.*”

«τὰς ἐντολὰς οἶδας· μὴ φονεύσης, μὴ μοιχεύσης, μὴ κλέψης, μὴ ψευδομαρτυρήσης, μὴ ἀποστερήσης, τίμα τὸν πατέρα σου καὶ τὴν μητέρα.» [20] ὁ δὲ ἔφη αὐτῷ· «διδάσκαλε, **ταῦτα**(*ούτος: n.pl.Acc.*) *πάντα ἐφυλαζάμην ἐκ νεότητός μου.*»

戒めはあなたもよく知っているはずです。『殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。欺き取ってはならない。あなたの父と母を敬え。』[20] すると、その人はイエスに言った。「先生。私は、それらはすべて、小さい時から守っております。」

一方次は、主節中で直接目的語の *sb* が動詞の後に現れる例である。ここで *pritičje seje* 「この喩え」とは先行文脈で語られた「種蒔き」の喩え全体を指す。以上、先行文脈の内容を指す *sb* の位置については、「マルコによる福音書」の例のみからは、はっきりした結論を出すことは困難である。

- (17) Mk.4.13: i gl<agol>a imъ “ne vëste li prityčę seje (sb: f.pl.Acc.). i kako vьse prityčę rozuměete. [...]”
 καὶ λέγει αὐτοῖς: «οὐκ οἶδατε τὴν παραβολὴν ταύτην (οὗτος: f.sg.Acc.), καὶ πῶς πάσας τὰς παραβολὰς γνώσεσθε; [...]»
 そして彼らにこう言われた。「このたとえがわからないのですか。そんなことで、
 いったいどうしてたとえの理解ができません。[...]」

量的には必ずしも多くはないが、後続の文脈の内容を指す場合もある。次はイエスの説教中に現れる例である。ここで znameniě si 「このようなしるし」の内容は先行文脈ではなく、後続の□で囲まれた部分によって表される。

- (18) イエスの説教中で、後続の文脈の内容を指す例。

Mk.16.17: “**Znamenie** že věrujaštiimъ **si** (sb: n.pl.Nom.) posledьstvujatъ imenemъ moimъ bęsy izdenatъ. jez<y>ky vьzglag<o>ljatъ novy [18] i vъ r<u>kachъ zmię vьzъmatъ. ašte i sьmrętno čto ispijatъ ničtože ichъ ne vrěditъ. na nedažbniky raky vьzložetъ. i sьdravi ba<da>tъ.”
 «**σημεία** δὲ τοῖς πιστεύουσιν **ταῦτα** (οὗτος: n.pl.Nom.) παρακολουθήσει: ἐν τῷ ὀνόματί μου δαιμόνια ἐκβαλοῦσιν, γλώσσαις λαλήσουσιν καιναῖς, [18] ὄφεις ἄροῦσιν κἄν θανάσιμόν τι πίωσιν οὐ μὴ αὐτοὺς βλάβῃ, ἐπὶ ἄρρώστους χεῖρας ἐπιθήσουσιν καὶ καλῶς ἔξουσιν.”
 「信じる人々にはこのようなしるしが伴います。すなわち、私の名によって悪霊を追い出し、新しいことばを語り、[18] 蛇をもつかみ、たとい毒を飲んでも決して害を受けず、また、病人に手を置けば病人はいやされます」。

3.2 主要な翻訳パターンから外れる場合。

主要な翻訳パターンから外れる場合についても実例を示しておく。最初は ἐκεῖνος ⇒ sb という翻訳のパターンである。イエスの「説教」中で、後行文脈の内容を指す

例と理解した。主要な翻訳のパターンに従えば *тъ* (m.pl.Nom. なら *ti* という形をとる) で訳されるところであるが、*сь* で訳されている。キュリロス・メトディオスによる意図的な選択によってこの形が選ばれたのかどうか知ることはできないが、この箇所では *si* の出現に違和感はなく、自然な文脈ができています。

- (19) Mk.4.20: a **si** (*сь*: m.pl.Nom.) *satъ sěanii na dobrě zemi. iže slyšetъ slovo i priemljatъ e. i plodetъ se. na tri deseti i šestъ desetъ i sьto.*
 καὶ **ἐκεῖνοί** (*ἐκεῖνος*: m.pl.Nom.) εἰσιν οἱ ἐπὶ τὴν γῆν τὴν καλὴν σπαρέντες, οἵτινες ἀκούουσιν τὸν λόγον καὶ παραδέχονται καὶ καρποφοροῦσιν ἐν τριάκοντα καὶ ἐν ἑξήκοντα καὶ ἐν ἑκατόν.
 「そしてこれが良い地に蒔かれた種です。みことばを聞いてこれを受け入れ、30 倍、60 倍、100 倍もの実を結ぶ人たちです。」

次はギリシア語で指示代名詞を伴わない ἐπὶ τὸν ὄχλον 「前置詞 + 冠詞 + 名詞対格」を名詞 + *сь* の *narodosъ* で²² 翻訳した例である。イエスによる発話を直接話法で引用したものであり、「直示的用法」である。この例については、偶然の結果として、あるいは未発見の異読の存在によって説明する以外にも、訳者、つまりキュリロス・メトディオスによる意図的な規範からの逸脱、言い換えれば、彼らがギリシア語原文の意味——イエスが目の前にいる群衆を指して言う——を考え、自己の判断と責任によって *сь* を補った可能性も否定できない。このようにギリシア語で指示代名詞が現れないのに *сь* を用いて訳した例は、他にもなお 2 例あり (いずれも主語の場合)、例外的な翻訳パターンであると同時に、まったくの偶然ではない可能性を示唆するものでもある。

- (20) Mk.8.2: “*milъ mi estъ narodosъ* (*сь*: m.sg.Nom.). ěko juže tri dñni prisědetъ mьně. i ne imatъ česo ěsti.”

²² *narodosъ* は普通名詞 *narodъ* (m.sg.Nom.) 「人々、民衆」と指示代名詞 *сь* (*сь*: m.sg.Nom.) の融合した形である。

«σπλαγχνίζομαι ἐπὶ τὸν ὄχλον, ὅτι ἡδὴ ἡμέραι τρεῖς προσμένουσίν μοι καὶ οὐκ ἔχουσιν τί φάγωσιν»

「私はこの群衆を可哀想に思う。もう3日も私といっしょにいて、何も食べる物がない。」

3.3 具体的な先行詞を持つ照応形と解釈しうる例。

名詞あるいは代名詞の形で現れる具体的な先行詞を持つ例が皆無というわけではない。次はその唯一の例であり、語りのテキストに現れる。先行詞は46節の「ide vъ gorā pomolitiъ se」¹⁰という文の∅主語（=イエス）。明示的な先行詞としてはさらにもう一つ前の文の定代名詞主語 samъ¹¹を考えることができる。ギリシア語の形は αὐτός¹²であるが、(7)、(8)に示した主要な翻訳のパターンにあるとおり、αὐτόςは tьで翻訳されるのがもっとも一般的であり、ここで実際に tьが現れていたとしても違和感はない。しかし同時に、sbの出現にも違和感はない。この sb がキュリロス・メトディオスによって意図的に選択されたものであるかは分からない。なおこの例は(10)の表では照応のタイプについて「その他」として分類した。

- (21) Mk.6.45: i abie ∅ ubēdi učeníky svoje vъniti vъ korabъ, i variti i na onomъ polu kъ vidъsaidě. donъdeže samъ (samъ: m.sg.Nom.) otъrustitiъ narody. [46] i otъrekъ se imъ ∅ ide vъ gorā pomolitiъ se. [47] I večeru byvъšju. bě korabъ po srēdě morě. a sb (sb: m.sg.Nom.) edinъ na zemi.

Καὶ εὐθὺς ∅ ἠνάγκασεν τοὺς μαθητὰς αὐτοῦ ἐμβῆναι εἰς τὸ πλοῖον καὶ προάγειν εἰς τὸ πέραν πρὸς Βηθσαϊδάν, ἕως αὐτὸς (αὐτός: m.sg.Nom.) ἀπολύει τὸν ὄχλον. [46] καὶ ἀποταξάμενος αὐτοῖς ∅ ἀπῆλθεν εἰς τὸ ὄρος προσεύξασθαι. [47] καὶ ὀψίας γενομένης ἦν τὸ πλοῖον ἐν μέσῳ τῆς θαλάσσης, καὶ αὐτὸς (αὐτός: m.sg.Nom.) μόνος ἐπὶ τῆς γῆς.

それからすぐに、自分の弟子たちを船に (∅ = イエスは) 強いて乗り込ませ、先に向こう岸のベツサイダに行くようにさせた。その間に自分は群衆を解散させられた。[46] それから群衆と別れ、祈るために山のほうに (∅ = イエスは) 行かれた。[47] そして夜になったとき、舟は湖の真中に出ており、この方一人だけが陸

地におられた。

3.4 イディオムの用法

sb の用法のうちで本来の指示代名詞そのものとしての使用でなく、かつもっとも特徴的な用法として、間投詞としての使用があげられる。形態的には se、すなわち中性・単数・主格あるいは対格と同じ形であり、ギリシア語の ἰδοὺ, ἴδε「見よ！」に対応する。現代ロシア語の «vot!»「ほら！」で翻訳することができる。次にその例を挙げる。

- (22) Mk.14.41: I pride tretiiici. i gl<agol>a imъ. “sъrite proče i počivaite. prispě konьčina pride časъ. se(sb: n.sg.Nom/Acc.) předaatъ se s<y>nъ čl<o>v<ě>čsky vъ račě grěšъnikomъ. [42] vъstaněte iděmъ. se(sb: n.sg. Nom/Acc.) předajei me približi se.”

καὶ ἔρχεται τὸ τρίτον καὶ λέγει αὐτοῖς· «καθεύδετε τὸ λοιπὸν καὶ ἀναπαύεσθε· ἀπέχει ἥλθεν ἡ ὥρα, ἰδοὺ παραδίδοται ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου εἰς τὰς χεῖρας τῶν ἁμαρτωλῶν. [42] ἐγείρεσθε ἄγωμεν· ἰδοὺ ὁ παραδιδούς με ἤγγικεν.»

そして（イエスは）3度目に来て、彼らに言われた。「まだ眠って休んでいるのですか。もう十分です。時が来ました。見なさい。人の子は罪人たちの手に渡されます。[42] 立ちなさい。行きましょう。見なさい。私を裏切る者が近づいてきました」。

3.5 まとめ

本章における観察は、次のようにまとめることができる。

- (23) sb の使用についてのまとめ

1. 主要な翻訳のパターンは οὗτος ⇒ sb である。
2. 現れるテキストのタイプについて特定の分布を示す。すなわち「直接話法」あるいはイエスの「説教」という、話された言葉で使用される。

3. 直示的用法と先行文脈の内容を指す用法の2つがあり、「直接話法」中では専ら直示的用法で使用されるが、「説教」中に現れたときは直示的用法と先行文脈の内容を指す用法の両方が拮抗して現れる。特定の名詞を先行詞としてとめることは例外的である。その意味で *sb* は純粋な照応形とは言えない。
4. 主要な翻訳のパターンから外れる使用の一部は、主要な翻訳のパターンで確立された用法に従って、訳者、つまりキュリロス・メトディオスの判断に従い、話者の眼前にある対象、人物を直示的に指すために *sb* が補われた可能性がある。同時に単に偶然の結果である可能性、異読テキストに起因する可能性も否定できない。
5. idiomatic な用法として、*idou, ide* ⇒ *se «votl»* という用法がある。これはその意味からして当然であるが、「直接話法」「説教」タイプのテキストで多く使われるが、「語り」タイプでも現れる。

例(3), (4)について見たとおり、古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』の「コメント」タイプのテキストでは2つの *sb* の用法があった。コメントの対象となる人物、すなわちその場面で最も重要な登場人物を直接指す用法と、先行文脈の内容を全体として指す用法である。前者を直示的用法に近い用法と理解すれば、2つの用法はすでにOCS 福音書にもその萌芽が見られたということになる。

さらに前者の用法、すなわちコメントの対象となる人物を直接指す用法に関連して、ヴェチェルカの次の指摘が興味深い。彼は「主語として現れる *sb* には人称代名詞としての意味がほとんど感じられない。… この機能で現れる *sb* は通常、強調された代名詞主語「他ならぬ何々、何々そのもの (*eben der, er selbst*)」という意味を示す：例えば Joh 6.58 *sb estb chlebъ sbъsbdy sb °nse* Z, M; A – οὗτός ἐστιν ὁ ἄρτος ὁ ἐξ οὐρανοῦ καταβάς.」(Večerka 1993: 56) とする。この箇所を前後の文脈を含めて引用する。

- (24) Jn.6.56: *Ėdy [moja pľtъ] i rijei moja kŕvъ. vъ mъně přěbyvaatъ i azъ vъ nemъ. [57] ěkože posъla mę živaі ot<ъ>cъ. i azъ živa otъca radi. i ědy [mę] tъ živъ bądetъ*

*mene radi*²³. [58] **sb** (**sb**: m.sg.Nom.) estъ chlēbъ sъšedy s<ъ> n<e>b<e>se. ne
ěkože ěse ot<ъ>ci vaši man'na. i umъrěše ědei **chlēbъ sb** (**sb**: m.sg.Acc.) živъ
badetъ vъ vѣkъ.”

ὁ τρώγων μου τὴν σάρκα καὶ πίνων μου τὸ αἷμα ἐν ἐμοὶ μένει κἀγὼ ἐν αὐτῷ. [57] καθὼς
ἀπέστειλέν με ὁ ζῶν πατήρ κἀγὼ ζῶ διὰ τὸν πατέρα, καὶ ὁ τρώγων με κἀκεῖνος ζήσει
δι' ἐμέ. [58] **οὗτός** (**οὗτος**: m.sg.Nom.) ἐστὶν ὁ ἄρτος ὁ ἐξ οὐρανοῦ καταβάς, οὐ καθὼς
ἔφαγον οἱ πατέρες καὶ ἀπέθανον· ὁ τρώγων **τούτον** (**οὗτος**: n.sg.Acc.) **τὸν ἄρτον** ζήσει
εἰς τὸν αἰῶνα.

私の肉を食べ、私の血を飲む者は、私のうちにとどまり、私も彼のうちに（とど
まります）。[57] 生ける父が私を遣わし、私が父によって生きているように、**私**
を食べる者、この者も私によって生きるのです。[58] これは、天から下ってきた
パンです。あなたがたの先祖がマナを食べて、死んだようなことはありません。
このパンを食べる者は永遠に生きます」。

これはイエスによる説教の一節である。58 節の冒頭に現れる主語の **sb**、同じ節の
末尾に名詞を修飾する形で現れる対格目的語の **sb**²⁴ の先行詞をしいて先行文脈中に求
めるとすれば、その候補は *moja plъtъ* 「私の肉を」、*me* 「私を」のいずれか、あるい
は両方ということになろう。しかしこの文脈を読んでみると、ここで **sb** が照応形と
してそれらを承けた代名詞であるという印象はあまり受けない。一方で、何かを聴き
手の眼前に提示しているわけでもなく、純粹に直示的と言うこともできない。このヴェ
テルカの言う「強調された代名詞主語」は、まさにその場面で最も重要な要素を指
しているのである。

sb にこのような働きがあるとすれば、3.4 で見たイディオムの用法、中性・単数・
主格あるいは対格の形 *se* の間投詞 «vot!» としての使用も、この働きに適合した用法
であると考えられる。

23 イタリック部分は Codex Zogaphensis によって補った。

24 正しくは **sb** という形になる。

4 OCS における「遠称」の指示代名詞 *onъ*

「遠称」²⁵とされる *onъ* について分析する。次の(25)では(7)で概略示した調査結果に加え、照応のタイプについての調査結果を示した。照応のタイプとしては 1) 連続照応：同一の主語が連続する場合、すなわち当該の文の代名詞主語の先行詞が直接先行する文でも主語として現れる場合、2) 長距離連続照応：他の文を挟んで主語が連続する場合、すなわち当該の文の代名詞主語の先行詞が、直接先行する文には現れないが、間に他の文を挟んで先行する文で主語として現れる場合、ただし間に挟まれる文として従属文は数えるが、発話動詞によって導入され直接話法で引用された登場人物の台詞は数えない、3) 斜格照応：主語が交替する場合、すなわち当該の文の代名詞主語の先行詞が、直接先行する文の斜格目的語として現れる場合、4) 準斜格照応：当該の文の代名詞主語の先行詞が、直接先行する文の斜格目的語として現れることが期待されるが、実際には現れない場合、5) 長距離斜格照応：間に他の文を挟んで主語が交替する場合、すなわち当該の文の代名詞主語の先行詞が、直接先行する文には現れないが、間に他の文を挟んで先行する文で斜格目的語として現れる場合、ただし間に挟まれる文として従属文は数えるが、発話動詞によって導入され直接話法で引用された登場人物の台詞は数えない、6) その他、という 6 つを区別することにする。イディオムの用法については、これら照応のタイプは非関与的である。

25 ハブルガーエフは *onъ* に «тот далекий» 「遠くにある」(Chaburgaev 1974: 214) という意味を与えたうえで、「… 対話の参加者のいずれに対しても関係のない人物あるいは事物について言及されるときは、代名詞 *i (jego, jemu etc.) あるいは *onъ* (onogo, onomu etc.) によって指示が行われる」(Chaburgaev 1974: 225) とする。Diels (1963: 206) では «jener, jene, jenes» という訳が、Vaillant (1948: 136) では «celui-là, ce» という訳が付されている。

(25) 全体的分布

			総数	+ Nom., Pron.	照応のタイプ						テキストのタイプ		
					連続 照応	長連続 距離照 応	斜格 照応	準照 斜格	長斜 距離 照応	その他	語り	説教	直接 話法
онъ	+ že	ὁ δέ	主語	47	0	0	37	4	6	0	47	0	0
		Ø	主語	5	0	0	2	2	1	0	4	1	0
		ἐκεῖνος	主語	3	1	0	2	0	1	0	2	1	0
			目的語	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0
		αὐτός	主語	2	0	0	1	0	0	0	1	1	0
		ἐκεῖνος	主語	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0
		idiomatic	-	6	0	-	-	-	-	-	5	0	1

4. 1 主要な翻訳パターン ὁ δέ ⇒ онъ же について

主要なタイプに網掛けを施した。すなわち次の(26)に示すような観察結果が得られる。

(26) ὁ δέ ⇒ онъ же の翻訳について

1. онъ は古ロシア語におけるのと同様、онъ же V 構文で使用される。
2. 「語り」タイプのテキスト、すなわち地の文で使用される。
3. 照応のタイプについては「斜格照応」「準斜格照応」「長距離斜格照応」、すなわち何らかの意味での斜格照応に集中する。

次は典型的な例としての、語りタイプのテキストにおける「斜格照応」での使用である。oni že řeše「彼らは言った」中の当該の指示代名詞 oni の先行詞は、直接引用されたイエスの言葉を挟んで先行する文 i vьprosi je「すると（イエスは）彼らに訊ねられた」中の 3 人称代名詞複数対格 je を先行詞として取っている。例(2)で見た古ロシア語の例と同じく、ここではイエスとその弟子たちという 2 つのグループが登場し、両者の行為が交互に描かれており、その一方の弟子たちについて онъ が使用されている。

- (27) Mk.8.1: [...] prizъnavъ učeniky svoje is<us>ъ. gl<agol>a imъ. [2] “milъ mi estъ narodosъ. ёko juže tri dъni prisёdeť mъně. i ne imatъ česo ёsti. [...]” [4] i

otъvěštaše emu učenicí ego. “otъ kǎdu sьje možetъ kъto <sъde> насытити chlēbъ na pustyni.” [5] i Ø vъprosi je (*i: m.pl.Acc.)²⁶ “koliko imate chlēbъ.” **oni** (onъ: m.pl. Nom.) **že** řeše “sedmъ.”

[...] προσκαλεσάμενος τοὺς μαθητὰς αὐτοῦ λέγει αὐτοῖς· [2] «σπλαγχνίζομαι ἐπὶ τὸν ὄχλον, ὅτι ἤδη ἡμέραι τρεῖς προσμένουσίν μοι καὶ οὐχ ἔχουσιν τί φάγωσιν· [...] [4] καὶ ἀπεκρίθησαν αὐτῷ οἱ μαθηταὶ αὐτοῦ ὅτι πόθεν τούτους δυνήσεται τις ὧδε χορτάσαι ἄρτων ἐπ' ἐρημίας; [5] καὶ Ø ἡρώτα αὐτούς, «πόσους ἔχετε ἄρτους;» οἱ (ó: m.pl.Nom.) δὲ εἶπαν «ἐπτά.»

[...] 自分の弟子たちを呼んでイエスは言われた。[2] 「私はこの群衆を可哀想に思う。もう3日も私といっしょにいて、何も食べる物が無い。… [4] 彼の弟子たちは彼に答えた。「ここで、荒れ野のなかで、誰がどこからパンを手に入れて、この人たちを満腹させることができますよう」。[5] するとØ（イエスは）彼らに訊ねられた。「パンはどれだけありますか」。彼らは言った、「7 つです」。

次の文脈には2つの onъ že V 構文が現れる。Aは「準斜格照応」の例である。ここで、当該の onъ と同一指示の斜格目的語の先行詞があるとすれば、下線を引いた učenicí ego gl<agol>aše 「彼の弟子たちは言った」の部分に現れるはずであるが、そこには期待される与格の jemu 「彼に」は実現していない。一方、Bは先行詞として emu 「彼に」を持つ、通常の「斜格照応」の例である。

- (28) Mk.6.35: i uže času mъnogu minǎvъšu. Pristǎrъše kъ nemu učenicí ego gl<agol>aše. ěko “pusto estъ mѣsto. i juže godina minǎ. [...] ” [37] **onъ**^A (onъ: m.sg.Nom.) **že** otъvěštavъ řeče imъ. “dadite imъ vy ěsti.” i Ø gl<agol>aše emu^B (*i: m.sg.Dat.). “da šedъše kupimъ dъvѣma sъtoma pēnędzъ chlēby. i damъ imъ ěsti.” [38] **onъ**^B (onъ: m.sg.Nom.) **že** gl<agol>a imъ. “koliko imate chlēbъ. idѣte i

26 *i は主格では現れない。斜格形でのみ現れ、3人称人称代名詞の代わりとして使われる。時として文法書のパラダイムでは指示代名詞 onъ, ono, ona の斜格形として扱われることもあるが、onъ, ono, ona は属格 onogo, onogo, onoję, 与格 onomu, onomu, onoi … というように固有の斜格形を持つ。

vidite.”[...]

Καὶ ἤδη ὥρας πολλῆς γενομένης προσελθόντες αὐτῷ οἱ μαθηταὶ αὐτοῦ²⁷ ἔλεγον ὅτι «ἔρημός ἐστιν ὁ τόπος καὶ ἡδη ὥρα πολλή· [...]» [37] ὁ^A(ὁ: m.sg.Nom.) δὲ ἀποκριθεὶς εἶπεν αὐτοῖς· «δότε αὐτοῖς ὑμεῖς φαγεῖν.» καὶ ὁ λέγουσιν αὐτῷ^B, «ἀπελθόντες ἀγοράσωμεν δηναρίων διακοσίων ἄρτους, καὶ δώσωμεν αὐτοῖς φαγεῖν;» [38] ὁ^B(ὁ: m.sg.Nom.) δὲ λέγει αὐτοῖς· «πόσους ἔχετε ἄρτους; ὑπάγετε ἴδετε» [...]

すでに多くの時間が過ぎていたので、彼のところにやってきて、彼の弟子たちは言った。「ここはへんぴな所で、もう時刻もおそくなりました。…」[37] すると彼は^A 彼らに答えて言われた。「あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい」。そこで (ὁ 弟子たちは) 彼に^B 言った。「私たちが出かけて行って、200 デナリものパンを買ってあの人たちに食べさせるように、と言われるのですか」。[38] すると彼は^B 彼らに言われた。「パンはどれぐらいありますか。行って見て来なさい」。[...]

「長距離斜格照応」の例も示しておく。oni「彼ら＝イエスを捕らえるために送られてきた人々」を含む当該の文 oni že vřzložĩše řacě na nř「すると彼らはイエスに手をかけ」とこの oni と同一指示の斜格先行詞 imř「彼らに」を含む文の間には、下波線でマークした i přĩsedř abie přĩstapř kř nemu gl<agol>a. “ravvi ravvi.” i oblobyza i.「そして(彼は) やって来るとすぐに彼(イエス) に近寄って「先生、先生」と言い、そして彼に口づけした」という文が介在している。

- (29) Mk.14.44: Dastř že přẽdajeĩ ego znamenĩe imř(*i: m.pl.Dat.) gl<agol>e. “egože ařte lobřřa iměte i tř estř. i veděte sřchranřno.” [45] i přĩsedř abie přĩstapř kř nemu gl<agol>a. “ravvi ravvi.” i oblobyza i. [46] oni(oni: m.pl.Nom.) že vřzložĩše řacě na nř i jese i.

δεδώκει δὲ ὁ παραδιδούς αὐτὸν σύσσημον αὐτοῖς λέγων· ὃν ἂν φιλήσω αὐτός ἐστιν κρατήσατε αὐτὸν καὶ ἀπάγετε ἀσφαλῶς. [45] καὶ ἐλθὼν εὐθὺς προσελθὼν αὐτῷ λέγει·

²⁷ αὐτοῦ は *B.Θ.Θpm* によって補った。

ῥαββί καὶ κατεφίλησεν αὐτόν [45] οἱ (ὁ: m.pl.Nom.) δὲ ἐπέβαλαν τὰς χεῖρας αὐτοῦ καὶ ἐκράτησαν αὐτόν.

イエスを裏切る者は、彼らにこう言って合図を与えてあった。「私が口づけをする人、その人を捕まえよ。その人だ。そして、しっかりと引いて行くのだ」。[45] そして(彼は) やって来るとすぐに彼(イエス) に近寄って「先生、先生」と言い、そして彼に口づけした。 [46] すると彼らはイエスに手をかけ、そして彼を捕えた。

以上見た、 $\acute{o} \delta\acute{\epsilon} \Rightarrow onъ \acute{z}e$ という翻訳パターンに従い、小詞 *ze* とともに現れる *onъ* は、基本的に古ロシア語の *onъ ze* V 構文と同じ性質を持っていると考えられる。

4. 2 主要な翻訳パターンから外れる場合

4. 2. 1 *onъ* とともに *ze* が現れる場合

上で例を見た主要な翻訳パターンから外れる例について見てみたい。*onъ* が小詞 *ze* を伴う場合と伴わない場合に分けて考える。ただしその前に、一見すると $\acute{o} \delta\acute{\epsilon} \Rightarrow onъ \acute{z}e$ という主要な翻訳パターンから外れているように見えるが、異読を見るとこのパターンに従っていることが分かる例もあることに注意しておきたい。例えば次は、Nestle-Aland 25 版の本文に従えば「 $\emptyset$ 代名詞 $\Rightarrow onъ \acute{z}e$ 」という例外的な翻訳パターンに従っているかのように見える。しかし、同本文に採用されていないコイネー型(ビザンティウム型)²⁸ では $\acute{o} \delta\acute{\epsilon}$ が現れていることが分かる²⁹。照応のタイプとしては「準斜格照応」である。このようなコイネー型の異読テキストによれば主要な翻訳パターンに従う例は他にも Mk.5.40, Mk.12.14 の例がある。

28 Nestle-Aland では ϕ で表示される。メツガーによれば、コイネー型(ビザンティウム型とも呼ばれる)本文は、3世紀末にアンティオケのルキアヌスが作った校訂版にもとづき、ビザンツで教会の「公認本文」として採用された。しかしルキアヌスの校訂版はそれ以前の本文型にあった諸要素を組み合わせた2次的な性格のものであり、これにもとづくコイネー型本文に固有の異読は、現在の聖書本文批評では本文として採用されていない。cf. Metzger (1968) 邦訳『新約聖書の本文研究』(1983: 237)。

29 この例および Mk.12.14 の例は、Večerka (1993: 56) では、ギリシア語原典で $\acute{o} \delta\acute{\epsilon}$ が現れないにも関わらず OCS で *onъ ze* で翻訳されている例として扱われている。

- (30) Mk.6.27: i abie posъlavъ c<ě>s<a>ръ voina. povelě prinesti glava e(go) **онъ** (онъ: m.sg.Nom.) **ѣ** šedъ usěkna i vь[vь] tem(ъ) nici. i prinese glava ego na misě i dastъ ja děvici. [...]

καὶ εὐθὺς ἀποστείλας ὁ βασιλεὺς σπεκουλάτορα ἐπέταξεν ἐνέγκαι τὴν κεφαλὴν αὐτοῦ.
ὁ (ὁ: m.sg.Nom.) **δε**³⁰ ἀπελθὼν ἀπεκεφάλισεν αὐτὸν ἐν τῇ φυλακῇ καὶ ἤνεγκεν τὴν
κεφαλὴν αὐτοῦ ἐπὶ πίνακι καὶ ἔδωκεν αὐτὴν τῷ κορασίῳ, [...]

そこですぐに王は兵士を送り、彼（ヨハネ）の首を持って来るように命じた。
そこで彼（兵士）は行って、牢のなかで彼の首をはね、その首を盆に載せて持っ
て来て、これを少女に渡した。 [...]

これに対し、次は実際に主要な翻訳のパターンから外れる例である。ἐκεῖνος δέ ⇒ **онъ ѣ** というパターンで翻訳されている。(8)に示した主要なパターンに従えば **тъ** を用いて訳されたはずである。しかし、照応のタイプについて見ると「長距離斜格照応」であり、**онъ ѣ** の使用そのものは文脈に適合している。OCS テキストを読むかぎり違和感はない。主要な翻訳パターンによって確立した **онъ ѣ** V 構文の用法をモデルにして、訳者、すなわちキュリロス・メトディオスの判断によって **онъ ѣ** が採用された可能性は否定できない。

- (31) Mk.16.19 g<ospod>ъ ѣ is<us>ъ po gla<gola>nii ego **кѣ nimъ** (*i: m.pl.Dat.),
vъzne se na nebo. i sěde o desnaia b<og>a. [20] **они** (онъ: m.pl.Nom.) **ѣ**
išedъše propověděše vъsadě. [...]

Ὁ μὲν οὖν κύριος Ἰησοῦς μετὰ τὸ λαλῆσαι **αὐτοῖς** (αὐτός: m.pl.Dat.) ἀνελήμφθη εἰς
τὸν οὐρανὸν καὶ ἐκάθισεν ἐκ δεξιῶν τοῦ θεοῦ. [20] **ἐκεῖνοι** (ἐκεῖνος: m.sg.Nom.) **δὲ**
ἐξεληθόντες ἐκήρυξαν πανταχοῦ, [...]

それから、(イエスは) 彼らに言われた。「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。 [...]」。[19] 主イエスは、**彼らに**こう話されて後、

30 ὁ δέ は **αὐτοῖς** pm による。Nestle-Aland 25 版の本文では καὶ。

天に上げられた。そして（彼は）神の右の座に着かれた。[20] そこで彼らは出て
行って、至る所で福音を宣べ伝えた。…

次も同じく ἐκεῖνος δέ ⇒ onъ же のパターンである。語りタイプのテキストでなく、「説教」のなかに現れるが、イエスによる喩え話の一節であり、話し言葉でありながら語りの要素を併せ持つ。照応のタイプは「斜格照応」である。この例も、訳者の判断により意図的にこの翻訳のパターンが採られたという可能性は否定できない。

(32) Mk.12.6: ešte že iměaše edinogo s<y>na. vřzljublenaago svoego. posъla i togo kъ nimъ (*i: m.pl.Dat.) poslědъ gl<agol>ę. ěko “posramlějať se s<y>na moego.”
[7] oni(onъ: m.pl.Nom.) že teŕzatele kъ sebě rěše. ěko “sъ estъ naslědъnikъ. priděte ubiěmъ i i naše bādetъ dostoěnie.”

ἐτι ἓνα εἶχεν, υἱὸν ἀγαπητόν· ἀπέστειλεν αὐτὸν ἔσχατον πρὸς αὐτοὺς(αὐτός: m.pl.Acc.)
λέγων ὅτι ἐντραπήσονται τὸν υἱόν μου. [7] ἐκεῖνοι(ἐκεῖνος: m.pl.Nom.) δὲ οἱ γεωργοὶ
πρὸς ἑαυτοὺς εἶπαν ὅτι «οὗτός ἐστιν ὁ κληρονόμος· δεῦτε ἀποκτείνωμεν αὐτόν, καὶ ἡμῶν
ἔσται ἡ κληρονομία.»

(ぶどう園の主人は) なおもうひとりの息子、その愛する者を持っていた。(彼は)
『私の息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後にその者を彼らのもとに送っ
た。[7] しかしその農夫たちはこう話し合った。『これはあと取りだ。さあ、彼を
殺そう。そうすれば、財産は我々のものだ。』

次は、καὶ «and» + Ø 主語 ⇒ onъ же の例である。上の2つの例は、いずれもギリシア語原典でも小詞の δέ が現れている。次の例ではギリシア語原典では δέ は現れないが、スラブ語訳の方では小詞 же が現れている。語りのテキストに現れる「斜格照応」タイプであり、onъ же の使用そのものは文脈に適合して違和感がない。これも主要なパターンをモデルに訳者の裁量によって行われた可能性は否定できない。

- (33) Mk.6.22: i vŕšedŕši dŕšteri eje irodiědě. i plęsavnŕši i ugoŕždŕši irodovi. i vŕzleŕęŕštiimŕ sŕ nimŕ. reče c<ě>s<a>rŕ dęvici “prosi u mene emuŕe aŕte choŕteŕši i damŕ ti.” [23] i kletŕ se ei. ěko “egoŕe aŕte proŕiŕi damŕ ti. do polŕ c<ě>s<a>rstviě moego.” [24] ona (onŕ: f.sg.Nom.) ŕe iŕedŕši reče kŕ materi svoei. “ĉeso proŕa.” [...]

καὶ εἰσελθούσης τῆς θυγατρὸς αὐτῆς τῆς Ἡρῳδιάδος καὶ ὀρχησαμένης ἤρπεν τῷ Ἡρώδῃ καὶ τοῖς συνανακειμένοις. ὁ δὲ βασιλεὺς εἶπεν τῷ κορασίῳ· «αἰτήσόν με ὃ ἐὰν θέλῃς, καὶ δώσω σοι» [23] καὶ ὤμοσεν αὐτῇ, «ὅτι ὃ ἐὰν αἰτήσῃς δώσω σοι ἕως ἡμίους τῆς βασιλείας μου.» [24] καὶ ἐξελθοῦσα Ὁ εἶπεν τῇ μητρὶ αὐτῆς· «τί αἰτήσωμαι»; [...]

ヘロデヤの娘がはいって来て、踊りを踊り、ヘロデも列席の人々も喜んだ。そこで王は少女に言った、「何でもほしい物を言いなさい。与えよう。」[23] また彼女に誓った、「おまえの望む物はおまえに与えよう。私の国の半分でもよい。」[24] そこで彼女は出て行ってその母親に言った。「何を願いましょうか」。...

以上のようにギリシア語原典で小詞の δέ が現れる場合、さらにはたとえギリシア語で δέ が現れなくとも、スラブ語テキストでそれに対応する ŕe が現れるときは、訳者、つまりキュリロス・メトディオスの判断によって onŕ ŕe という翻訳形が採られた可能性がある。しかし同時に、上の(30)の例が、一見主要な翻訳のパターンから外れているものの、異読テキストに従えば主要な翻訳パターンに従うものであったのと同様、何らかの未知の異読テキストの発見により、これらの例も主要な翻訳パターンに従っていることが判明する可能性は常に残されている。

勿論、主要な翻訳パターンから外れ、かつ、その理由を説明できない場合もある。次は、ὁ δέ が onŕ ŕe でなく、名詞 + ŕe で翻訳された例である。文脈から主語がイエスであることは明らかであり、それをあえて名詞を用いて明示する必然性はない。テキストのタイプは「語り」、照応のタイプは「斜格照応」であり、主要な翻訳パターンに従って onŕ ŕe で翻訳されることを妨げるものは何もないはずである。

- (34) Mk.5.33: Žena že uboěvъši sę i trepeštašti. vědašti eže bystъ ei. pride i pripade kъ nemu. i reče emu (*i: m.sg.Dat.) vъsa istina. [34] **is<us>ъ же** reče ei “dъšti věra tvoě s<ъ>p<a>s<e> tę [...]”
- ή δὲ γυνή φοβηθεῖσα καὶ τρέμουσα, εἰδύια ὁ γέγονεν αὐτῇ, ἦλθεν καὶ προσέπεσεν αὐτῷ καὶ εἶπεν αὐτῷ (αὐτός: m.sg.Dat.) πᾶσαν τὴν ἀλήθειαν. [34] ὁ (ὁ: m.sg.Nom.) δὲ εἶπεν αὐτῇ, «θυγάτηρ, ἡ πίστις σου σέσωκέν σε· [...]»
- 女は恐れおののき、自分の身に起こった事を知り、やってきてイエスの前にひれ伏し、彼にすべて真実を語った。[34] そこでイエスは、彼女に言われた。「娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです。[...]」。

なお特殊な例として、照応形としてでなく、初出の指示対象を直示的に指示するために使用されていると理解すべき例が1例あったので、示しておく。ἐκεῖνος ⇒ onъ же という翻訳のパターンに従っている。ただし主格主語ではなく、与格形で現れる。なおこの例は(25)の表では「目的語」とし、照応のタイプは「その他」に分類してある。イエスの説教中³¹に現れる例である。

- (35) Mk.4.11: i gla<gola>še imъ “vamъ estъ dano vēdēti tainaa c<ě>s<a>r<ъ>stviě b<o>žič. **Oněmъ** (onъ: m.pl.Dat.) **že** vъněštъnimъ vъ pritičachъ vъsě byvaj'atъ. καὶ ἔλεγεν αὐτοῖς· «ὅμῃν τὸ μυστήριον δέδοται τῆς βασιλείας τοῦ θεοῦ· ἐκείνοις (ἐκεῖνος: m.pl.Dat.) δὲ τοῖς ἔξω ἐν παραβολαῖς τὰ πάντα γίνεται,
イエスは彼らに言われた。「あなたがたには、神の国の奥義が知らされている。しかし外にいる彼の者たちには、すべてが喩えで語られます。

4. 2. 2 onъ が же なしで現れる場合

前節で見た же を伴う onъ は、主要な翻訳のパターンから外れている場合であっても、その出現について説明が可能な場合、すなわちキュリロス・メトディオスの判断により意図的にそのような翻訳が行われた可能性を否定できない場合もあった。これ

31 この文脈は実は「説教」と考えるか「直接話法」と考えるか、微妙な判断が必要となるところである。

に対し、že を伴わずに現れる онъ は説明が困難である。

次は αὐτός ⇒ онъ のパターンに従っている。(8)で見た主要な翻訳のパターンに従えば αὐτός は тъ で翻訳されるはずであり、なぜ онъ が選ばれたか、説明するのは困難である。なおこの例は「説教」として分類したが、イエスによる喩え話であり、話し言葉であると同時に語りの要素も持っている。照応のタイプは「遠距離照応」である。

- (36) Mk.4.26: i gl<agol>aše “tako estъ cēsarestvie b<o>žie. ěkože čl<ově>kъ vъmětaatъ sĕme vъ zemljā. [27] i ∅ sъpītъ. i ∅ vъstaatъ noštъ i dъnъ. i sĕme prozēbaatъ i rastetъ ěkože ne vēstъ онъ (онъ: m.sg.Nom.).

Καὶ ἔλεγεν· «οὕτως ἐστὶν ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ, ὡς ἄνθρωπος βάλη τὸν σπóρον ἐπὶ τῆς γῆς, [27] καὶ ∅ καθεύδῃ καὶ ∅ ἐγείρηται νύκτα καὶ ἡμέραν, καὶ ὁ σπόρος βλαστᾷ καὶ μηκύνῃται ὡς οὐκ οἶδεν αὐτός (αὐτός: m.sg.Nom.).

そして (イエスは) 言われた。「神の国はこのようなもので、人が地に種を蒔いて、[27] 夜も昼も、(種を蒔いた人が) 寝て、(∅ = 種を蒔いた人が) また起きている間に、種は芽を出し、成長する。 しかしこれは彼が知らない間のことである。

次も、同じく αὐτός 起源で онъ が že なしで現れる例である。テキストのタイプは語り、照応のタイプは「斜格照応」である。もし že があれば、完全に文脈に適合する例であり、キュリロス・メトディオスが意図的にこのように翻訳したと考えることも可能であるが、že が現れない以上、そのような判断は困難である。

- (37) Mk.7.36: i zaprĕti imъ da nikomuže ne povĕdĕtъ. elikože imъ (*i: m.pl.Dat.) тъ zapovĕdaaše. oni (онъ: m.pl.Nom.) pače izlīcha propovĕdaacha.
καὶ διεστείλατο αὐτοῖς ἵνα μηδενὶ λέγωσιν· ὅσον δὲ αὐτοῖς (αὐτός: m.pl.Dat.) διεστέλλετο, αὐτοῖ (αὐτός: m.pl.Nom.) μᾶλλον περισσότερον ἐκήρυσσον.

そして (イエスは) このことをだれにも言わないように彼らに命じられたが、彼が彼らに禁じれば禁じるほど、彼らはかえって言いふらした。

4.3 イディオム的使用。

onъ のイディオム的な使用として挙げられるのは *onъ polъ* 「対岸、向こう岸」という表現である。*εἰς τὸ πέραν* ⇒ *na onъ polъ* 「向こう岸へ」という決まった言い方で使用される。(38)は語りタイプのテキストでの使用、(39)は「直接話法」中での使用である。

- (38) Mk.5.1: i pridā **na onъ polъ** morě. vъ stranā gadarinskā.

Καὶ ἦλθον **εἰς τὸ πέραν** τῆς θαλάσσης εἰς τὴν χώραν τῶν Γερασηνῶν.

こうして（彼らは）湖の**向こう岸**、ゲラサ人の地に着いた。

- (39) Mk.4.35: I gl<agol>a imъ vъ tь denъ večeru byvъšu. “prëiděmъ **na onъ polъ**.”

Καὶ λέγει αὐτοῖς ἐν ἐκείνῃ τῇ ἡμέρᾳ ὁπίας γενομένης· «διέλθωμεν **εἰς τὸ πέραν**.»

その日、夕方になって、イエスは弟子たちに、「さあ、**向こう岸**へ渡ろう」と言われた。

4.4 まとめ

本節における観察は次のようにまとめることができる。

- (40) *onъ* の使用についてのまとめ

1. *onъ* は小詞 *že* を伴って使用される場合と *že* を伴わない場合の両方がある。
2. *že* を伴い *onъ že V* 構文として現れる場合の方が圧倒的に多く、*ὁ δέ* ⇒ *onъ že* という翻訳パターンが確立していることが確認される。
3. この *onъ že V* 構文は、2 人の人、グループが対立して登場する場面に現れ、*onъ* は直接、間接に先行する文に斜格の形で現れる（潜在的に斜格の形で現れていれば、実際に現れなくともよい）同一指示の名詞を先行詞としてとる。
4. ギリシア語原典に対応を持たない *onъ že* について、すくなくともその一部は、この *ὁ δέ* ⇒ *onъ že* という確立した翻訳パターンに基づいて、訳者すなわちキュリロス・メトディオスの判断によって選択された可能性を否定できない。ただし、未発見の異読テキストに基づく可能性は常に残る。

ヴェチェルカは、ギリシア語代名詞の対応を持たない *онъ* について、それがつねに *že* とともに現れると指摘するとともに、「このような（佐藤：*онъ* と *že* の）結合は叙事的テキストとその主題的な展開を結びつけるための複合的な表現手段として働く。このような（佐藤：ギリシア語代名詞の対応を持たない）*онъ* と *že* の結合が、福音書の最も古い写本のすべてにおいて異読を示すことなく現れることは、この表現手段がすでに本来的なものであり、キュリロス・メトディオスによる翻訳のなかにその地位を確立していたこと、スラブ語において通常の表現手段であったことを示すものである。」（Večerka 1993: 56）としている。*онъ* と *že* の結合のもつこのような性質は、彼の言うギリシア語代名詞との対応を持たない *онъ* についてのみでなく、ギリシア語の *ὁ δέ* 起源の *онъ* についても当てはまるものであり、1章で見た、古ロシア語における指示代名詞 *онъ* の文体的使用へと連続的につながっていると理解することができる。

5 OCS における「中称」の指示代名詞 *тъ*

最後は「中称」³²とされる *тъ* の分析である。(41)に見える通り、ギリシア語の起源として *αὐτός*、*ἐκεῖνος* という2つの主要な形式があり、いずれも主語および目的語として現れる。さらに *ἐκεῖνος* 起源の場合には、状況語として現れる例も多い。従って、それらを区別した上で、照応関係を調べる。その際、データの分類の必要上、目的語に関して新たに次のような照応関係を考えることにする。1) 目的語についての「連続照応」：同一指示の目的語が同一の格をとって連続して現れる場合、すなわち当該の文の代名詞目的語の先行詞が直接先行する文中で同じ格をとる目的語として現れる場合、2) 目的語についての「斜格照応」：同一指示の目的語が異なる格をとって連続する場合、すなわち当該の文の代名詞目的語の先行詞が直接先行する文中で異なる格を

32 ハブルガーエフは「もし言及される人物あるいは事物が対話の相手に近ければ、あるいは語りの場合は、登場人物の1人に近ければ、その人物あるいは事物に対する指示は指示代名詞 *тъ* «ТОТ» 「あの、その」によって行われる」（Chaburgaev 1974: 225）とする。Diels（1963: 203）では «der, die, das» という訳が、Vaillant（1948: 136）では «ce» という訳が与えられている。

取って現れる場合、である³³。

(41) 全体的分布

O C S	Gr.	統語的機能	総数	+ Nom., Pron.	照応のタイプ						テキストのタイプ		
					連 続 照 応	長 距 離 照 応	斜 格 照 応	長 距 離 照 応	直 示 的	他	語 り	説 教	直 接 話 法
ty	αὐτός	主語	11	2	4	3	4	0	0	0	5	3	3
		目的語	3	0	3	0	0	0	0	0	2	1	0
	ἐκεῖνος	主語	6	4	4	0	1	1	0		1	5	0
		目的語	5	2	2	1	1	0	0	1	2	3	0
		状況語	9	9	0	2	1	0	0	6	3	6	0
	Nominal	属格修飾語	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0
	ό	主語	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0
	οὗτος	目的語	2	0	0	0	0	0	1	1	0	1	1
	∅	主語	2	0	1	1	0	0	0	0	1	1	0
		目的語	1	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0
	idiomatic	状況語	13	0	-	-	-	-	-	-	5	5	3

5.1 主要な翻訳パターン

主要なタイプに網掛を施した。ここでまず気づくのが、*sb* および *onъ* の場合に比べて分布の範囲が広く、特定のタイプでの使用に偏らないということである。すなわちテキストのタイプについては、「直接話法」そのものはそれほど多くはないものの、

33 1) 目的語についての「連続照応」の例：Mk.8.7: *i imēacha i rybicъ malo i ty* (ty: f.pl.Acc.) *blagoslovivъ reče*. [...] : *kai eĩchon [ixθúdia ὀλίγα] kai eúloghēsas autà* (autós: n.pl.Acc.) *eĩpen* [...] : 「また（彼らが）少しの魚を持っていたので、（イエスは）それらをも祝福して言った。」；2) 目的語についての「斜格照応」の例：Mk.16.12: *po sichъ že dvñema otъ nichъ gredaštema. ěvi se iněmъ obrazomъ. idaštema na selo. [13] i ta* (ty: m.du.Nom.) *šedъša vъzvěstiste pročiimъ. ni tēma* (ty: m.du.Dat.) *že věry jese*. Μετὰ δὲ ταῦτα δυσὶν ἐξ αὐτῶν περιπατοῦσιν ἐφανερώθη ἐν ἑτέρᾳ μορφῇ πορευομένοις εἰς ἀγρόν· [13] *κακεῖνοι* (καί + ἐκεῖνος: m.pl.Nom.) *ἀπελθόντες ἀπήγγειλαν τοῖς λοιποῖς· οὐδὲ ἐκεῖνοι* (ἐκεῖνος: m.pl.Dat.) *ἐπίστευσαν*. 「その後、彼らのうちのふたりが歩いていたり、田舎の方に向かう2人にイエスは別の姿でご自分を現わされた。[13] そこでこのふたりも、他の人たちのところへ行行って知らせたが、彼らはふたりを信じなかった。」また、これ以外にも次のような関係考えた。3) Nominal ⇒ ty 「属格修飾語」「連続照応」の項に分類したのは次のような例である：Mk.1.16: *chodě že pri mori galileiscě. vidě simona* (Nominal: m.sg.A.) *i anđrěj'a bratra togo* (ty: m.sg.Gen.) *simona*. vъmetajašta mrěže vъ more. bēašete bo rybarě. Καὶ παράγων παρὰ τὴν θάλασσαν τῆς Γαλιλαίας εἶδεν Σίμωνα (Nominal.m.sg.Acc.) καὶ Ἀνδρέαν τὸν ἀδελφὸν Σίμωνος (Nominal.m.sg.Gen.) ἀμφιβάλλοντας ἐν τῇ θαλάσῃ· ἦσαν γὰρ ἄλεῖς. 「（イエスは）ガリラヤ湖のほとりを歩いておられ、シモンとそのシモンの兄弟アンデレを見た。2人は湖で網を打っている

「語り」と「説教」の両方で同じように使用されることが観察される。一方照応のタイプについても、「長距離連続照応」を含めて「連続照応」のタイプが多いものの、「斜格照応」も無視できない数の例が存在する。

(42) *тб* について

1. *αὐτός* ⇒ *тб* と *ἐκεῖνος* ⇒ *тб* という 2 つの主要な翻訳のパターンが存在する。
2. テクストのタイプ、照応のタイプのいずれについても、*sb* や *onb* の場合と比べて特定の分布に偏らず、広い分布を持つ。

5. 1. 1 *αὐτός* ⇒ *тб* の場合

2 つある主要な翻訳パターンのうち、まず *αὐτός* ⇒ *тб* について見る。最初の例は、主語の「連続照応」タイプである。イエスの「説教」のなかの喩え話であり、話し言葉であると同時に、語りの要素も持つ。同一の主語（「次男」を指す）が連続しており（先行詞は $\emptyset$ 代名詞）、仮にこの *тб* が欠けていても、すなわち $\emptyset$ 代名詞が当該の文の主語であったとしても、文脈に不自然さはなく、意味も十分明確に通じる。すなわち *тб* はここで余剰的であるということになる。2. 1 で *αὐτός* の強調機能について「3 人称代名詞の等価物として *αὐτός* は、*ὁ δέ* に現れる *ὁ* と同様、強調の 'he' という意味を持つ。」という Blass and Debrunner 1961© の見解を引用した。しかし *αὐτός*

ところだった。2 人は漁師だったからである。」；4) *ἐκεῖνος* ⇒ *тб* 「状況語」「斜格照応」の項は次のような例である：Mk.2.20: *pridatъ že dьnъ egda otъimetъ se otъ nichъ ženichъ. i tьgda postetъ se vь ty dьni*: ἐλεύσονται δὲ ἡμέραι ὅταν ἀπαρθῇ ἀπ' αὐτῶν ὁ νυμφίος, καὶ τότε νηστεύουσιν ἐν ἐκείνῃ τῇ ἡμέρᾳ. 「しかし、花婿が彼らから取り去られる日々が来ます。それらの日々には（花婿の友人たちは）断食します。」（ただしこの例は従属文を考慮すると「長距離斜格照応」になる）；5) *ἐκεῖνος* ⇒ *тб* 「状況語」「他」の項は、名詞の形をとって現れる明確な先行詞は存在しないが先行文脈からその内容がわかる場合を指す。次がその例である：Mk.13.11: *Egda že vodetъ vy prědajašte ne pьcete se prězde čto vьzglagolete : [i] ni poučaitе se. nъ eže ašte dastъ se vamъ vь тб (тб: m.sg.Acc.) časъ to glagolete. ne vy bo bьdete glagoljaštei. nъ d<u>chъ s<ve>ty: kai ὅταν ἄγωσιν ὑμᾶς παραδιδόντες, μὴ προμεριμνᾶτε τί λαλήσητε, ἀλλ' ὃ ἐὰν δοθῇ ὑμῖν ἐν ἐκείνῃ (ἐκεῖνος: f.sg.Dat.) τῇ ὥρᾳ, τοῦτο λαλεῖτε: οὐ γάρ ἐστε ὑμεῖς οἱ λαλοῦντες ἀλλὰ τὸ πνεῦμα τὸ ἅγιον. [彼らに捕えられ、引き渡されたとき]、何と言おうかなどと前もって心配してはいけません。あれこれと考えてはいけません。そのときあなたに示されること、それを話さない。何故なら話すのはあなたがたではなく、聖霊だからです。」*

⇒ *tb* の強調機能の本質は、余剰的な表現があえて実現するという点にあり、*tb* は無標の $\emptyset$ 代名詞に対する強調的な形式ということになる。これは *οὗτος* ⇒ *sb* の持つ、当該文脈での重要な要素を指すという意味での強調作用との大きな違いである。上で見た(12)から(18)までの例に現れる *οὗτος* ⇒ *sb* を、自然な文脈に影響を与えることなく省略することは不可能である³⁴。

- (43) Mk.12.20: *bě že sedmъ bratrije. i prъvy poje ženā i umiraje ne ostavi sēmene. [21] i vъtory poje ja i $\emptyset$ umьrěť i **tb** (tb: m.sg.Nom.) ne ostavi sēmene. i tretii takozde.*

ἐπτα ἀδελφοὶ ἦσαν· καὶ ὁ πρῶτος ἔλαβεν γυναῖκα καὶ ἀποθνήσκων οὐκ ἀφῆκεν σπέρμα·
[21] καὶ ὁ δεύτερος ἔλαβεν αὐτήν καὶ $\emptyset$ ἀπέθανεν καὶ οὐδὲ αὐτός (αὐτός: m.sg.Nom.)
ἄφῆκεν³⁵ σπέρμα, καὶ ὁ τρίτος ὡσαύτως·

さて7人の兄弟がいました。長男が妻をめとりましたが、死ぬときに、子を残しませんでした。[21] そこで次男が彼女を妻にしましたが、やはり ($\emptyset$ = 彼も) 死にました。そして彼は種を残しませんでした。3男も同様でした。

次は「語り」タイプのテキスト中に現れる「斜格照応」の例である。ギリシア語を見ると2つの *αὐτός* があるが、Bの方は5. 2で扱う *αὐτός* ⇒ *samъ* のパターンに従って翻訳されている。Aは直接先行する文に現れる与格目的語 *emu* 「彼に = イエスに」を先行詞として取り、当該の文で問題の *tb* が主語として現れている。この文脈で動詞 *gla<gola>še* (impf.3sg.) の主語となりうるのは「イエス」のみであり、この *tb* が実現しなくても、すなわち $\emptyset$ 代名詞で現れても、理解に支障はない。実際、例(9)の Mk.1.13 では同じく「斜格照応」で $\emptyset$ 代名詞が主語として現れている。

- (44) Mk.2.24: *i pharisēi gl<agolaa>cha $\emptyset$ emu^A (*i: m.sg.Dat.). “vižďb čto tvorěť vъ soboty egože ne dostoitъ.” [2.25] i **tb**^A (tb: m.sg.Nom.) gl<agola>aše imъ. “něste li*

³⁴ 例外は(14)である。また(18)もあるいは例外となるかもしれない。

³⁵ *ϑ* (*D*, *Θ*) *pl* による。Nestle-Alandt 25 版では *μὴ καταλιπὼν*。

nikoliže čli. čto sьtvori dav<y>dь egda trěbova. i vьzabьka **samь**^B (samь: m.sg. Nom.) i iže běacha sь nimь.”

καὶ οἱ Φαρισαῖοι ἔλεγον αὐτῷ^A (αὐτός: m.sg.Dat.)· «ἴδε τί ποιοῦσιν τοῖς σάββασιν ὁ οὐκ ἔξεστιν;» [25] καὶ αὐτὸς^{A 36} (αὐτός: m.sg.Nom.) λέγει αὐτοῖς· «οὐδέποτε ἀνέγνωτε τί ἐποίησεν Δαυὶδ ὅτε χρεῖαν ἔσχεν καὶ ἐπέινασεν αὐτὸς^B (αὐτός: m.sg.Nom.) καὶ οἱ μετ' αὐτοῦ;»

そしてパリサイ人たちが彼（イエス）に^A言った。「ご覧なさい。なぜ彼らは、安息日なのに、してはならないことをするのですか」。[25] すると彼は^A 彼らに言われた。「彼自身^B、そして一緒にいた人たちが飢えて腹を空かせたとき、ダビデが何をしたか、読んだことがないのですか。」

次は「直接話法」中に現れる「斜格照応」の例である。「直接話法」では比較的短い文が現れる。長い文はイエスによる発話のなかに現れ、「説教」に分類されることも多い。そのために「直接話法」では代名詞を用いて主語を明示する必要はあまり生じない。しかし時として、このように長い発話が引用されることもある。

- (45) Mk.14.13: [...] “iděta vь gradь i sьrěšteta vy čl<o>v<ě>кь. vь skъdьbьnicě voda nose. po nemь iděta. [14.14] i ideže ašte vьnidetь rьcěta g<ospodi>nu domu, ěko ‘učitelь gl<agolje>ть. кьде estь obitěль ideže pascha sь učeniky svoimi sьněmь.’ [15] i тѣ (тѣ: m.sg.Nom) vama pokažetь gorьnica velija. postьlana gotova. tu ugotovaita namь.”

[...] «ὐπάγετε εἰς τὴν πόλιν, καὶ ἀπαντήσῃ ὑμῖν ἄνθρωπος κεράμιον ὕδατος βαστάζων· ἀκολουθήσατε αὐτῷ, [14] καὶ ὅπου ἂν εἰσέλθῃ εἶπατε τῷ οἰκοδεσπότῃ ὅτι «ὁ διδάσκαλος λέγει· ποῦ ἐστὶν τὸ κατάλυμά μου ὅπου τὸ πάσχα μετὰ τῶν μαθητῶν μου φάγω;» [15] καὶ αὐτὸς (αὐτός: m.sg.Nom.) ὑμῖν δείξει ἀνάγαιον μέγα ἐστρωμένον ἑτοιμον· καὶ ἐκεῖ ἐτοιμάσατε ἡμῖν.»

[...] 「都にはいりなさい。そうすれば、かめに水を入れて運んでいる男に会うから、

36 αὐτός は *Gal* による。*Nestle – Aland* 25 版本文では αὐτός は見られず καὶ λέγει αὐτοῖς となっている。

その人について行きなさい。[14] そしてその人がどこかに入って行ったら、家の主人に言いなさい、『弟子たちといっしょに過越の食事をする、私の客間はどこかと先生が言っておられる。』[15] すると彼はあなた方に席が整って用意のできた2階の広間を見せてくれます。そこで私たちのために用意をなさい」。

次の例は「語り」に現れ、分類上は「連続照応」として分類した。しかし先行詞は実際には先行する文中にあるのではなく、当該の代名詞を含む関係節を導く関係代名詞 *ize* が同一指示の先行詞である。厳密には「連続照応」の定義には当てはまらないことになる。統語的にもこの *tь* は余剰的である。むしろ *tь* で翻訳するのではなく、5.2で扱う *αὐτός* ⇒ *samъ* という翻訳のパターンを採用する可能性もあったのではないかと考えられる³⁷。

- (46) Mk.15.42: *i juže pozdě byvъšju. Poneže bě paraskevъg'ii pascě. eže estъ kъ sobotě. [43] Pride iosiphъ otъ arimatěje. blagoobrazenъ sъvětъnikъ. [ize] i tь(tь: m.sg.Nom.) bě čaje c<ě>s<a>r<ь>stviě b<o>žič. i drъznavъ vъnide kъ pilatu. i prosi těla is<uso>va.*

Kai ἤδη ὀψίας γενομένης, ἐπεὶ ἦν παρασκευή ὃ ἐστὶν προσάββατον, [43] ἐλθὼν Ἰωσήφ [ὁ] ἀπὸ Αριμαθαίας, εὐσχήμων βουλευτής, καὶ αὐτός(αὐτός: m.sg.Nom.) ἦν προσδεχόμενος τὴν βασιλείαν τοῦ θεοῦ, τολμήσας εἰσῆλθεν πρὸς τὸν Πιλᾶτον καὶ ᾔτήσατο τὸ σῶμα τοῦ Ἰησοῦ.

すでに夕方になった。備えの日、すなわち安息日の前日であったので、[43] 有力な議員であり、みずからも神の国を待ち望んでいたところのアリマタヤのヨセフがやってきた。(彼は) 思い切ってピラトのもとに行き、イエスの身体を引き渡

37 『口語訳聖書』および現代ロシア語訳聖書では次のように「彼自身」という意味が明示的に示されている。cf. 『口語訳聖書』「アリマタヤのヨセフが大胆にもピラトの所へ行き、イエスのからだの引き取りかたを願った。彼は地位の高い議員であって、彼自身、神の国を望んでいる人であった。」; 『共同訳聖書』「アリマタヤ出身で身分の高い議員ヨセフが来て、勇気を出してピラトのところへ行き、イエスの遺体を渡してくれるようにお願いした。この人も神の国を待ち望んでいたのである。」; Библия «пришел Иосиф из Аримафеи, знаменитый член совета, который **и сам** ожидал Царствия Божия, осмелился войти к Пилату, и просил тела Иисусова.»

しを求めた。

5. 1. 2 ἐκεῖνος ⇒ тѣ の場合。

次いで ἐκεῖνος ⇒ тѣ の場合について見る。最初の例はイエスの「説教」中に現れる「連続照応」の例である。先行する条件節のなかに名詞の形で先行詞があり、当該の指示代名詞 to はそれが修飾する名詞とともに現れている。しかしこの тѣ を含む主語名詞句 cěsarьstvo to が仮に省略され、∅ 代名詞で表されることになっても、自然な文脈は保たれ、また意味の伝達にも支障はない。

- (47) Mk.3.24: i ašte c<ě>s<a>rstvo na se rozdělīt se. ne možetъ stati cěsarьstvo to (тѣ: n.sg.Nom.).

καὶ ἂν βασιλεία ἐφ' αὐτήν μερισθῇ, οὐ δύναται σταθῆναι ἡ βασιλεία ἐκείνη (ἐκεῖνος: f.sg.Nom.).

もし国が互いに分裂したら、その国は立ち行きません。

次は「語り」タイプのなかに現れる「斜格照応」の例である³⁸。先行する文に与格で現れる idaštema na selo 「村へ向かって歩く 2 人に」を ἐκεῖνος 起源の тѣ の双数形 ta で承けている。ここでも ta を省略することは可能である。意味が不明瞭になることもない。

- (48) Mk.16.12: po sichъ že dŭvěma otъ nichъ grędaštema. ěvi se iněmъ obrazomъ. [idaštema na selo.] [13] i ta (тѣ: m.du.Nom.) šedьša vъzvěstiste pročiimъ. ni těma (тѣ: m.du.Dat.) že věry jęse.

38 この例では、ギリシア語テキストを見ると δυὸν ἐξ αὐτῶν περιπατοῦσιν と πορευομένοις εἰς ἀγρόν はともに複数与格であり、イエスを主語とする ἐρανερώθη の与格目的語である。もしスラブ語がこれに忠実な訳であると考えれば、OCS テキストの dŭvěma otъ nichъ grędaštema と idaštema na selo はともに ěvi se iněmъ obrazomъ の与格目的語と考えるべきであろう。しかし dŭvěma otъ nichъ grędaštema の部分は絶対与格構文である可能性が強い。さらには idaštema na selo も絶対与格構文である可能性がないわけではない。しかし、本稿では少なくとも idaštema na selo については ěvi se iněmъ obrazomъ の与格目的語として理解した。

Μετὰ δὲ ταῦτα δυσὶν ἐξ αὐτῶν περιπατοῦσιν ἐφανερώθη ἐν ἑτέρᾳ μορφῇ πορευομένοις εἰς ἀγρόν· [13] **καὶ ἐκεῖνοι** (καί + ἐκεῖνος: m.pl.Nom.) ἀπελθόντες ἀπήγγειλαν τοῖς λοιποῖς: οὐδὲ ἐκεῖνοις (ἐκεῖνος: m.pl.Dat.) ἐπίστευσαν.

その後、彼らのうちのふたりが歩いていたとき、田舎の方に向かう2人に別の姿で（イエスは）ご自身を現わされた。[13] そこでこのふたりは、行って、他の人たちに知らせたが、（彼らは）ふたりの話を信じなかった。

本節で見た ἐκεῖνος 起源の tь、前節で見た αὐτός 起源の tь の両者は同一の分布を示し³⁹、かつ両者を意味的に区別することは OCS テクストの観点からは困難である。同時にギリシア語テキストを見ても、そこで使用されている ἐκεῖνος と αὐτός の違いを明確に説明することは困難である。9世紀のビザンツ人であり、当時のギリシア語のネーティブ・スピーカーであったキュリロスとメトディオスがこの2つの形式をスラブ語の1つの形式 tь で翻訳する道を選んだことは、1つの大きな決断であったと考えたい。

5.2 αὐτός ⇒ samъ⁴⁰ の翻訳パターン。

当初この調査を始めた段階ではスラブ語の onъ, sb, tь という3つの指示代名詞が分析の出発点であり、対象であった。しかし tь については、αὐτός と ἐκεῖνος という2つのギリシア語指示代名詞をその起源として持つことが分かり、同時に、そのうちの1つ αὐτός が tь だけでなく定代名詞 samъ「自身」でも訳されることが分かった。2.1にまとめたように、ギリシア語 αὐτός の側から見れば、このような「強意」こそがこ

39 両者の違いは ἐκεῖνος 起源の tь は状況語として使用されるという点にある。例えば次のような例である。Mk.1.9: I bystъ vъ dъni ty (tь: m.pl.Acc.). pride is<us>ъ otъ nazareta galileiskaago. i krъsti se otъ ioana vъ iordaně. Καὶ ἐγένετο ἐν ἐκεῖναις (ἐκεῖνος: f.pl.Dat.) ταῖς ἡμέραις ἦλθεν Ἰησοῦς ἀπὸ Ναζαρέθ τῆς Γαλιλαίας καὶ ἐβαπτίσθη εἰς τὸν Ἰορδάνην ὑπὸ Ἰωάννου. 「そのころ、イエスはガラヤのナザレから来られ、ヨルダン川で、ヨハネからバプテスマをお受けになった。」; Mk.2.20: pridatъ že dъnъe. egda otъimetъ se otъ nichъ ženichъ. i tъgda postetъ se vъ ty (tь: m.pl.Acc.) dъni. ἐλεύσονται δὲ ἡμέραι ὅταν ἀπαρθῇ ἀπ' αὐτῶν ὁ νυμφίος, καὶ τότε νηστεύσουσιν ἐν ἐκείνῃ (ἐκεῖνος: f.sg.D.) τῇ ἡμέρᾳ. 「しかし、花婿が彼らから取り去られる時が来ます。そうなれば、その日には断食します。」

40 例えば Diels (1963: 208) では «selbst» という意味を付されている。

の語の本来の意味とされる。その際、「～自身」「同じ～」という2つの意味が区別されるという。しかし「マルコによる福音書」のデータの範囲では、OCSの *samъ* には「同じ～」という意味で使われている例は認められなかった。

まず分布については、(49)に示したが、「語り」が多いものの「説教」「直接話法」との差も決定的とは言えず、*αὐτός* ⇒ *тъ* の場合に似て、分布が偏っていない様子が見てとれる。定代名詞はそれが付加された名詞・代名詞を修飾する機能を持っており、名詞・代名詞と一緒に現れることが予想されるが、実際には必ずしも常にそうでないことも分かる。先行詞の存在は必要としないので、照応関係についての調査は行わない。

(49) *samъ* の分布

OCS	Gr.	統語的機能	総数	+ Nom. Pron.	テキストのタイプ		
					語り	説教	直接話法
<i>samъ</i>	<i>αὐτός</i>	主語	7	2	4	2	1
	<i>σεαυτοῦ</i>	主語	1	0	0	0	1
		目的語	1	0	0	1	0
	<i>ἐαυτοῦ</i>	主語	1	1	0	1	0
		状況語	1	0	0	1	0

次の例は「あなた方だけで」という意味で使用されている。ただしその意味の確定は *samъ* の使用からだけでは困難であり、「一人きりで」を意味する *κατ' ἰδίαν* 「前置詞＋形容詞」⇒ *edini* 「形容詞」という語がともに現れているために、その意味がはっきりする。なお、この例は2人称の人称代名詞 *vy* とともに現れる例でもある⁴¹。

- (50) Mk.6.30: *i sъbъraše se ap<osto>li kъ is<us>u. i vъzvъstiše emu vъsě eliko sъtvoriše i eliko naučiše [31] I reče imъ “Priděte **vy sami** (*samъ*: m.pl.Nom.) **vъ pusto město edini**, i počiite malo “ b[ě]ěachъ bo prichodeštii. i ochodeštei mъnodzi. i ne bě imъ koli poně ěsti.*

41 『口語訳聖書』では「… さあ、あなた方は、人を避けて寂しい所へ行って、しばらく休むがよい…」と訳され、『新共同訳聖書』では「…さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい…」と訳されている。現代ロシア語訳聖書では « … пойдите вы **одни** в пустынное место и отдохните немного … » となっている。

Καὶ συνάγονται οἱ ἀπόστολοι πρὸς τὸν Ἰησοῦν, καὶ ἀπήγγειλαν αὐτῷ πάντα ὅσα ἐποίησαν καὶ ὅσα ἐδίδαξαν [31] καὶ λέγει αὐτοῖς· δεῦτε ὑμεῖς αὐτοὶ (αὐτός: m.pl.Nom.) κατ' ἰδίαν εἰς ἔρημον τόπον καὶ ἀναπαύσασθε ὀλίγον. ἦσαν γὰρ οἱ ἐρχόμενοι καὶ οἱ ὑπάγοντες πολλοί, καὶ οὐδὲ φαγεῖν εὐκαίρουν.

使徒たちは、イエスのもとに集まって来て、すべて自分たちのしたこと、教えたことを彼に報告した。[31] そこで（彼は）彼らに、「さあ、あなたがただけで、寂しい所へ行きなさい。そしてしばらく休みなさい」と言われた。人々の出入りが多く、食事する時間もなかったからである。

つぎは「イエス自身が」と理解しうる例である⁴²。

- (51) Mk.3.13: I vъzide na gorā i prizъva ježe **samъ** chotě. i idā kъ nemu.

Καὶ ἀναβαίνει εἰς τὸ ὄρος, καὶ προσκαλεῖται οὓς ἠθέλεν αὐτός, καὶ ἀπῆλθον πρὸς αὐτόν. さて、イエスは山に登り、ご自身のお望みになる者たちを呼び寄せられた。彼らはみもとに來た。

つぎも「イエス自身は」と理解しうる⁴³。

- (52) Mk.4.36: i oтpушtъše narodъ. poješe i ёkoже бѣ vъ ladii. i iny же ladije бѣача sъ nimъ. [37] i bystъ burě vētrъna veliě. vlъny же vъlivachā se vъ ladijā. ёko juже pogręznāti chotěаше [38] i бѣ **samъ** na kръmě na vъzglavъnici съре. i vъzbudiše i. i gla<gola>še emu učitelju. “ne rodiši li ёko pogyblemъ.”

καὶ ἀφέντες τὸν ὄχλον παραλαμβάνουσιν αὐτὸν ὥς ἦν ἐν τῷ πλοίῳ, καὶ ἄλλα πλοῖα ἦν

42『口語訳聖書』では「さてイエスは山に登り、みこころにかなった者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとにきた。」と訳され、『新共同訳聖書』では「イエスが山に登って、これと思う人々を呼び寄せられると、彼らはそばに集まって來た。」と訳されている。現代ロシア語訳聖書では «Потом взшел на гору и позвал к Себе, кого Сам хотел; и пришли к Нему.» とある。

43『口語訳聖書』では「ところがイエス自身は、舳の方でまくらをして、眠っておられた」と訳され、『新共同訳聖書』では「しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。」と訳されている。現代ロシア語訳聖書では «А Он спал на корме на возглавии.» とある。

μετ' αὐτοῦ. καὶ γίνεται λαῖλαψ μεγάλη ἀνέμου καὶ τὰ κύματα ἐπέβαλλεν εἰς τὸ πλοῖον, ὥστε ἤδη γεμίζεσθαι τὸ πλοῖον. [38] καὶ ἦν αὐτὸς⁴⁴ ἐν τῇ πρύμνῃ ἐπὶ τὸ προσκεφάλαιον καθεδύων. καὶ ἐγείρουσιν αὐτὸν καὶ λέγουσιν αὐτῷ· διδάσκαλε, οὐ μέλει σοι ὅτι ἀπολλύμεθα;

そこで弟子たちは、群衆をあとに残し、彼（＝イエス）を舟に乗ったままお連れした。他の舟も彼について行った。[37] すると激しい突風が起こり、波が舟にかぶり舟は沈みそうになった。[38] ところがイエス自身は、とものほうで、枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして言った。「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われませんか」。

αὐτόςを指示代名詞 $\tau\bar{\epsilon}$ で訳すか定代名詞 $\text{sam}\bar{\epsilon}$ で訳すかは、ギリシア語の母語話者であった翻訳者キュリロス・メトディオスの判断によって行われた。上で(46)の例について、αὐτός $\Rightarrow$ $\text{sam}\bar{\epsilon}$ という翻訳の可能性について示唆した。しかしそこではキュリロスとメトディオスは自らの責任において αὐτός $\Rightarrow$ $\tau\bar{\epsilon}$ という選択を行ったことになる。

5.3 まとめ

1. 照応形としての αὐτός $\Rightarrow$ $\tau\bar{\epsilon}$, ἐκεῖνος $\Rightarrow$ $\tau\bar{\epsilon}$ と、強調形としての αὐτός $\Rightarrow$ $\text{sam}\bar{\epsilon}$ を分けて考える必要がある。
2. 照応形としての αὐτός $\Rightarrow$ $\tau\bar{\epsilon}$, ἐκεῖνος $\Rightarrow$ $\tau\bar{\epsilon}$ には、テキストのタイプについても、照応のタイプについても特別な分布は見られない。また起源を異にする2つの $\tau\bar{\epsilon}$ が OCS テキストで異なる機能、異なる意味を持っているという明白な証拠は示せない。単独で現れる、すなわち名詞・代名詞を伴わない $\tau\bar{\epsilon}$ は、いずれの起源であってもともに照応形、3 人称の人称代名詞として使用されている可能性がある。
3. もし $\tau\bar{\epsilon}$ の使用に何らかの「強調」の意味があるとすれば、それは無標のゼロ代名詞に対して明示的な代名詞を使ったという意味での「強調」である。

⁴⁴ ἦν αὐτὸς は $\text{H}D\Theta pm$ による。Nestle-Alandt 本文は αὐτὸς ἦν。

しかし *sb* と *onb* に比べると文体的には中立的な形式ということになる⁴⁵。

4. ギリシア語の αὐτός と ἐκεῖνος を同じ *tb* で翻訳したことは、キュリロスとメトディオスの大きな決断であったと考えられる。

6. 結語

——古教会スラブ語翻訳パターンの成立と翻訳者キュリロス・メトディオスの功績——

本稿における観察の結果は、次のようにまとめることができる。

OCS 福音書では『過ぎし年月の物語』におけるような「コメント」タイプのテキストは存在せず、従って「事実叙述」タイプと「コメント」タイプの違いも存在しない。しかし、*onb* が「事実叙述」タイプのテキストで文体的効果をもって使用され、*sb* が「コメント」タイプのテキストで最も重要な要素を指示するために使用される、という『過ぎし年月の物語』における用法は、OCS における 2 つの指示代名詞の用法と矛盾しない。それに遡るものであると言える。

すなわち OCS の *sb* は直示的用法と先行文脈の内容全体を指すという 2 つの用法を持ち、少なくとも主語として使用されたときには、その場面で最も重要な要素を指すという考え方も可能である。これは古ロシア語の「コメント」タイプテキストにおける *sb* の用法につながるものである。一方、*onb* は古ロシア語の「事実叙述」タイプのテキストにおける *onb* と同様、基本的に *onb* *že* V という構文で使用されることが確認された。その起源はギリシア語の ὁ δέ V 構文である。ギリシア語の ὁ δέ V 構文が、OCS の翻訳テキストを経て、古ロシア語の年代記に受け入れられ、特別な文体的価値を確立することになったと考えることは十分可能である。

これら 2 つの指示代名詞に対して、*tb* はより中立的な位置を占めている。主語として明示的に現れる *tb* は、無標のゼロ代名詞主語と比べた場合には「強調」という意味を持つ。しかし、*onb* のように文体的な価値を持つこともなければ、*sb* のように

45 ヴェチェルカは「OCS で主語の機能を果たすことのできる 3 人称人称代名詞としての使用において、*tb* が意味的・機能的に見て他の 2 つの指示・照応的代名詞の「中央の」位置を占める [...]」(Večerka 1993: 53-54) とする。

当該文脈のなかで重要な要素を指示するという働きを持つこともない。中立的な3人称の人称代名詞としての機能を果たすことができるのは、この *тѣ* である。*сѣ* が文中の必須の要素であるのに対し、*тѣ* は余剩的であるという点に、*сѣ* と *тѣ* の違いを求めることもできる。

以上のような指示代名詞の翻訳に際してなされたキュリロスとメトディオスの貢献は、2つの側面から考えることができる。1つは体系的な観点からの貢献、すなわち翻訳のパターンを確立したということである。2人は *οὗτος* ⇒ *сѣ*、*ὁ δέ* ⇒ *онѣ же*、*αὐτός* ⇒ *тѣ*、*ἐκεῖνος* ⇒ *тѣ* という翻訳のパターンを確定し、ギリシア語の4つの指示代名詞を無理なくスラブ語の3つの指示代名詞に当てはめた。その際、ギリシア語の *αὐτός* と *ἐκεῖνος* を1つのカテゴリーとして扱い *тѣ* で翻訳したことは、大きな意義を持つと評価できる。いま1つは個別のケース、個別の文脈の翻訳に際して彼らが行った選択、判断である。彼らは自分たちが確定した主要な翻訳のパターンをモデルに、時としてこのパターンに外れる場合であっても、文脈に従い、大胆な訳を行った。これはとくにギリシア語の *ὁ δέ* に起源を持たない *онѣ же* に顕著である。また *αὐτός* をその意味に従って *тѣ* で訳すか、*самѣ* で訳すかを決めたのも、また彼ら自身である。

本稿の議論は、今後進めるべき本格的研究の予備調査として4福音書のなかから「マルコによる福音書」について行われた。4福音書は、当然ギリシア語原典において異なる性格を持ち、異なる文体的特徴を持つ。指示代名詞の使用もそれぞれで異なる。今後、他の3つの福音書についての調査が必要となる。また、これまで筆者は古ロシア語テキストの分析からは、指示代名詞 *тѣ* の本質については、十分な考察ができず、明確な考えを示すことができなかった。今後、本稿で観察した OCS の *тѣ* についての観察結果を古ロシア語の分析にフィードバックし、古ロシア語における *тѣ* の機能について再検討することも重要な課題である。

** 本研究の遂行に当たっては日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (C)「キエフ・ルーシにおける文章語の成立と古教会スラブ語の影響」20520383 (研究代表者 佐藤昭裕)、同基盤研究 (B)「ロシア諸年代記の正本と異本の PC 利用による比較対照研究とその応用」20320050 (研究代表者 中條直樹)、同基盤研究 (C)「スラブ語スラブ文学の比較対照研究の課題と方法」21520315 (研究代表者 中島由美) による補助を受けた。

参考文献

- Biblija: Knigi svjaščennogo pisanija vetchogo i novogo zaveta.* (1989). Moskva: Moskovskaja patriarchija.
- Blass, Friedrich and Albert Debrunner. (1961©) *A Greek Grammar of the New Testament and Other Early Christian Literature: A Revision of F. Blass and Al. Debrunner „Grammatik des neutestamentlichen Griechisch,” incorporating supplementary notes by A. Debrunner, Translated by R. W. Funk.* Chicago and London. 引用は Fifth Impression 1973 より。
- Chaburgaev, E. A. (1974) *Staroslavjanskij jazyk.* Moskva.
- Codex Marianus: Quattuor evangeliorum versionis palaeoslovenicae codex Marianus glagoliticus.* Jagić, V. (ed.) Berlin-St. Petersburg. 1883. (引用は Graz: Akademische Druck-u. Verlagsanstalt. 1969 刊の *Editiones monumentorum slavicae veteris dialecti* 版による。)
- Codex Zographensis: Quattuor evangeliorum codex glagoliticus olim Zographensis nunc Petropolitanus.* Jagić, V. (ed.) Berlin. 1879. (引用は Graz: Akademische Druck-u. Verlagsanstalt. 1954 年刊の *Editiones monumentorum slavicae veteris dialecti* による)
- Diels, Paul. (1963) *Altkirchenslavische Grammatik mit einer Auswahl von Texten und einem Wörterbuch.* Heidelberg.
- Ivanov, V. V. (1983) *Istoričeskaja grammatika russkogo jazyka.* Moskva.
- Metzger, Bruce M. (1968) *The Text of the New Testament.* 2nd ed. Oxford University Press. (邦訳『新約聖書の本文研究』橋本滋男訳、聖文社、1983 年改訂 2 版。)
- Nestle-Aland 第25版. *Novum testamentum graece cum apparatu critico curavit Eberhard Nestle novis curis elaboraverunt Erwin Nestle et Kurt Aland.* 25. Auflage. London. Printed in Germany 1975.
- PVL: *Polnoe sobranie russkich letopisej, t.1. Lavrent'evskaja letopis', vyp.1. Povest' vremennykh let. izd.2* 1926. Leningrad. (引用は L. Müller, *Handbuch zur Nestorchronik*, B.1, Forum Slavicum, B.48, München: Wilhelm Fink Verlag. 1977 による)
- 佐藤昭裕 (2005)『中世スラブ語研究—『過ぎし年月の物語』の言語と古教会スラブ語』(ユーラシア古語文献研究叢書3) 京都大学大学院文学研究科。
- (2008)『『過ぎし年月の物語』の文体と『コンスタンティノス伝』『メトディオス伝』の言語—対照研究の試み—』『京都大学文学部研究紀要』47: 1-82.
- Sato, A. (2008) “Stil' povestvovanija drevnerusskoj letopisi «Povest' vremennykh let» i jazyk Žitij Kirilla i Mefodija: opyt sopostavitel'nogo issledovanija.” in *Comparative and Contrastive Studies in Slavic Languages and Literatures 2008: Japanese Contributions to the 14th International Congress of Slavists*. 1-40.
- 『聖書 新共同訳』(1994) 日本聖書協会。
- 『新約聖書』1954 年改訳。日本聖書協会。
- Solov'ev, S. M. (1959) *Istorija Rossii s drevnejšich vremen, kn.1.* Moskva.
- Vaillant, André. (1948) *Manuel du vieux slave, t.1 Grammaire.* Paris.
- Večerka, Radoslav. (1993) *Altkirchenslavische (Altbulgarische) Syntax II. Die innere Satzstruktur.* Freiburg i. Br.: U.W. Weier Verlag.